百首部類

丹後守為忠家百首　一　二　三

同後度　一　二　三

特別
へ4
8196
11

842
ヘ4
8196
11

〈2016-209〉

丹後守家百首　初度

讀人

丹後守藤原爲忠朝臣

少納言藤原忠成

加賀守藤原顯廣（改名後成）

兵庫頭源仲正

伊豆守藤原爲業

敬位藤原爲盛（左近大夫　改名兼綱）

筑前権守藤原盛忠（改名爲經）

源頼正

丹後守家百首

題

春

正朔子日　海路霞　竹林鶯
雪中若菜　窓前梅　川岸柳
囲辺早蕨　山路樓　閑中春雨
沢辺春駒　関路帰雁　谷中呼子鳥
山田苗代　古砌菫菜　野外遊絲
巖上躑躅　瀧下欸冬　沼水杜若
池岸藤花　旅宿三月盡

夏

山家首夏　遠村卯花　雲間郭公
江中菖蒲　門田早苗　暁更照射
旅泊五月雨　寤寐水鶏　叢中蛍火
毎夜鵜川　遠山氷室　樹陰納涼
池上蓮　林頭蝉　川辺荒和祓

秋

泉辺初秋　七夕後朝　庭萩
籬中女郎花　野径薄　風前苅萱
雨後蘭　隣家荻　羈旅雁
嶺上鹿　杜間紅葉　苔上露
田家霧　垣根槿　深夜駒迎

嶋辺虫　水岸菊　十三夜月
遠郷擣衣　閏九月盡

冬

初冬時雨　橋上落葉　寒庭霜
閨上霰　松上雪　濱辺葦
暁天千鳥　谷川氷　川上水鳥
雨中網代　月前神樂　暁頭鷹狩
深山炭竈　閑居埋火　舩中除夜

戀

洩始戀　人傳戀　被返書戀
憑媒戀　詞和不會戀　卜戀
怠偽戀　契久戀　後朝隱戀
共忍戀

雜

谷風　峯雲　遣水
嶋巖　渕鶴　梢猨
神社　山寺　和琴
高麗笛　野酌　温泉
釣舟　王昭君　上陽人
楊貴妃　浦嶋子　遊女
眺望　慶賀

春

正朔子日

まちかねし千代のはしめの年かしは子日にかゝる今日そひける
為忠朝臣

いはしかる子日の松をひけは千代やともにちきる成らん
忠成

時ならぬ雪にはとしの小松原ひきくらへて春のしるしよ
親廣

めつらしき春のはしめの初子日ひかむとていそひけるかな
仲正

野へこれハ子日の松をひくへて春のなかれにけさハ成る
為業

はるゝ子日の松をひきそへて猶そかそむ千代の初春
為盛

あらたまる年をまつとやいはひつる子日のかける成らん
盛忠

いはひつる年のはしめの今朝ことにあれは子日にあひくらねとひ（とゝひ）
頼政

海路霞

浦波は衣の関の浪の上よりちわたるゝ八重霞子
為忠

舟ともくはれわたる霞のうちに見えて春はあかしの浦の松
忠成

親廣

秋は猶こきはなれゆく浦舟ハいくへか霞の霞へたつる
仲正

はるかなる舟のみすかたなりけりすこし見えゆく浦つたひして
為業

見わたせは八重の塩路に霞しく立ちかへる波
為盛

追風にうら漕舟のみえてはるける沖ハ霞こめたり
盛忠

春くれは霞みわたれるかけかのは浦漕舟のみえかくれみ
頼政

浦舟はなれ舟のみえぬをさすと思ひやまきれんものを海て

竹林鶯

谷ちかき竹よりいつる鶯の春をかさねし羽ともやせし
為忠

鶯とおもふもさそわれ竹のうけにそこかまたえをのうん
為成

呉竹の葉に鶯のさえつるやおもてにめつる春の声かな
顕廣

竹のうちにねくらとかけしを久しきとおもひ出つゝや鶯のなく
仲正

風ふけはうけの中のなりにかやよる海辺の鶯
為業

為盛

いその山を出て鶯の声すなる竹の林に

盛忠

鶯の初声の中ありし竹に住みて也

親政

宿近き竹の林に住なれてあさなゆふなに音をそ鳴（イ鶯の竹の中ならはよそにてねをたに聞せさらん）

雪中若菜

為忠

春日野とはる白雪に埋れて生ふる若菜は雪そ降る

忠成

消やらぬ雪分て見え人ゆひて摘める若菜哉

顕廣

雪の下もえする野辺の若菜をはきえぬまにまに摘はやる

仲正

きのふけふ若菜を摘とゆきすかふ海に野原の雪はむら消にけり

為業

去年とてはゆきまに消しを春日野ゝ雪かき分てわかな摘なる

為盛

まてしに雪は消なむと打むれて野辺のこせりはまそて摘ん

盛忠

見れは人あまた若菜に出来を同し山に雪そふりけり

頼政

あれはていくとせまて日ハふれぬ宮ゐ人の夢ハ

窓前梅

為忠

匂ひくる竹（柳イ）の梅の開くれは窓をてらちも春のよの月

忠成

軒端なるちらむ梅の花ちれてあかつき雪の色濃れ見れ

頼廣

冬の夜ハ雪の光にうつりけむ月のかけにも次白き花の匂ふ

仲正

（一歟　他本ニハ　細字ニテ書入レリ）

春風にさそはれてくる梅の香も窓の光里にあまる月影ハ

為業

軒近き梅ハよそえのさし入れて窓のうちまてさそふかれはゝる

為盛

窓ちかき梅の花の香入れハ玉章とのみえけてもあかぬ

盛忠

かけくるゝ春を玉章のにほひそうつりし花窓にちらくる梅の（匂ひよ）

頼政

（散りくるを窓より　白く梅花ねたるを　きよすはままそ入るる）

川岸柳

あ川りし竹（柳イ）の柳の流るゝふりとも絶ゆるまくかひてぬれ

為忠

青柳の緑やそこにうつるらん波のうへとみゆる見なせ川な

忠成

春されは柳のいとの打はへて岸に浪よる宇治川の水
親廣

絹のまれ遠く人かしゆ見ゆる宇治川邊なる出れの青柳のいと
仲正

たのむかなめくるくる見ゆる河端のたれまれたに花と春によみけむ
為業

かゝるひの柳のいとはかとそみえくなへてのまるめてなれをせはや
為盛

風吹は岸の波よる川よりも春ことにこその深くなる
盛忠

春風来るかたにもよせてまつ見ゆる宇治川邊の青柳の糸
頼政

岸邊早蕨

あやなくもけの浪のよるかは岸へよせて寄る青柳の絲
為忠

春の日のあたる岸に出てさわらひを折りしりてとかへりみる
忠成

春見えし春への光さわらひを折人やあらん
親廣

春ことにたえやらん家居はさわらひもえ出るころかな
仲正

春雨ふりさわらひもえ出る春のさかりにをりしるしの春ゆる

あれてやもえ出かんわりにける人に思ひの色のさるひ　爲業

毎ゆとも野辺のまへる早蕨やきえぬ思ひのあらはるらん　爲盛

やまさとのかなしハわれ迄来らくされとも思ひの色になる早蕨　盛忠

春されと日を経るくれなるゆかりのまた花をみしの色のさかひ　雅致

山路櫻

花散風の櫻に関をすゑて日を暮すか志賀の山越　為忠

芳野山花咲ころは志らぬ人見ればこれや逢坂の関　忠成

邦廣

さく花のまゝに櫻や春のみやこなり花見る人をとゞめかねつる　仲正

散花を見る折まゝに春ハ山路に雪ぞふる花　爲業

毎年に見なれたりともあかぬ山櫻さける所ハこゝろとまりて　為盛

枝しけれ人のこゝろをとゞめては道さまよひける山さかりかな　盛忠

むの名をまたしのふかしくて春霞立と山路にわけまとひ迷

頼政

花ゆかし山路に霞は中々へて家路のかたにそらわするゝ

閑中春雨

為忠

春雨は花のひもとくならひあれと人とはなれみやまの里

忠成

こゝ人とまき深山への思ひはなかれそふ春雨ときく

顕廣

はれくもり日もまたをさへるの春雨や心とさる人のおとろかすらん

仲正

雨ふれは外のつまもとかぬまて晴まのしらに春の山さと

為業

はるゝ夜も眺むる中に春雨の外にもみえてもえしられ

為盛

春雨の軒の雫ははつはつとさひしき中に詠めそゆる

盛忠

うちしむるかたれ日からはあるをとなくの声も何くらかれゆき

親政

さしてたゝ人もとはぬ宿中にはよそにならひて春雨ぞふる

沢辺春駒

為忠

こえ渡る世人へことゝ鴈かねや波路にかへる春さきの鴈

忠成

帰ことゝ春はのゝみよりはの雲の波路に鴈へいと遠かなる

顕廣

春ことにみをまつ鴈ハ河原やしけ代の水にかけとゝめなむ

仲正

いかに人まつもありけれハ春鴈ハきたらきの波にまかせてよせれはや

為業

中空にかへる人もかさの波にあまてきえみ鴈の名残せむ

為盛

冬くるは春の空にかへりて春されハさら人の鴈ハてかへて鳴

盛忠

春鴈の心にも由のゝ思て雲路かよふる波路ハこえてさらむ

教政

冬まちしかけの空に見て春ことなる浪の入江とあさる春こそ

開路帰雁

故郷をかへりの路ハ捨て春の空を鳴る名かな

為忠

旅人も立ちかへり白川の関路とすかへる鴈

忠成

雲路よりかへるかりは海路かりのをと関の名ハかへさむ

顕廣

雲路ゐとおつ人の宿はありせはやすくは戸の久ゝ遠

仲正

関守もえしらぬらん雲井よりかへるなるかりかね

為業

雲井より帰るこゑをはとゝめなむとなりのやまの次第関守

為盛

あまりなくかへるさよ人の居倉をおとろかすなるかり

盛忠

かりかねは関をもすくるかりかねも谷の名残てはあるらん

頼政

谷中呼子鳥

まちかねてとせぬ山のおくまてもたつねとよふこ鳥

為忠

山ふかみよふひもしらて谷の庵まてはかなかりけん

忠成

吹わたる春の嵐やさそふらん雲霧の底に呼子鳥なく

顕廣

わたの岩谷にしくゝのよふこ鳥らんなさけのゝよふこ鳥

仲正

谷川の邊にて来る人と行しけゆくよふことりかな

為業

為盛

ほりかしやをひろいし岩のこのまゝ深はれてゆするなと
盛忠

賤人となりにしゆふに呼子鳥みなかみ山の岩まちかくさ
頼政

嵐ふく嶺ら谷の呼子鳥岩の小川のをちこちもなし
山田苗代

うちなきのとその山田の苗代はいそくかまれてこのこのま◯（かり）
為忠

をやまたのこひちにたちてとりつかむ苗代水に袖ぬらしつる
忠成
顕廣

苗代のまときに苗のいろあるは◯の梢のうつるなりけり
仲正

外面なる田はのはこくわり返しよりかへしつゝ苗の苗（代）
為業

苗草をかきこれねくにかりおきて種のむろのまきはしめけり（まきそめけり）
為盛

小山田のたかゐのたゆる水をみぬほどやたね◯ねうせはきぬ（まよ）
盛忠

山川のおちくる峯との苗代ハ水をたくませせきとめ
頼政

小山里のねさの苗代にいねをせきとるよ月ハくもれなり

古砌菫菜

荒またにもせ雨ぬやとの軒は荒くたれともすみれの花は咲らん
為忠

年をへて荒れたるにはのかはらにもみきり折への若菜おとみえぬ
忠成

昔へのみかきのいしやとまくつれて苔むすみきりに菫咲なり
顕広

すみれ咲なれ都への砌こそくいにしへのこそ物かたる
仲正

さくりふるきみきりの花やさかふらんあれたる里の軒のしのふくさ
為業

故宮の軒はあれにきと来てみれは砌よりすみれの花咲にけり
為盛

苔むせる庭に宮の階のひまゝて相すみれの咲にけれ
盛忠

故里と尋てこれは庭とせしにこそ縁かくしとすみれ相ひけり
頼政

野外遊絲

春の野も見ひて野人よ出まよ枕にこそ縁よあそふいとゆふ
為忠

春くれは野原とみえすみとりあそ乱くあそふいとそ陽炎
忠成

あをふひとの[illegible]のいとゆふ　顕廣

春の野にいではけりと
ともにみたれあひて
いはりとともに匂ふいとゆふ哉

たつねくるいくすの野辺に
みたるゝやよすかたも
なくまをふいとゆふ

あさけいふけ野けをゆけは春風の
ふくにみたれてふとふいとゆふ

野へはれて春の日影のかけろふに[illegible]　仲正

さすかにや[illegible]のよそにも[illegible]とのみ　為業

つ　以上三首、脱落セリ依テ補入ス

巌上躑躅

いはにおふる白躑のかつふりかけてわつかにみやらいめつゝしかな
あさひかけきのへにさける岩つゝしなよくれなゐの色にもちる哉
岩つゝしいはぬの山にあるものをなにをはひとやさくにしもさく
まつをこそたつねあはと思でしかつゝしもいはのうへにさきけり
きくのこる雪かと
みえておくやまの
いはねにさけるいはつゝし哉
年をへてこけのころもに春をは
つゝしのうはきころいはねかな

以上六首脱落ス依テ補入

年経る岸の岩根に[illegible]て[illegible]　為忠

ありかつ[illegible]岩[illegible]いはねつゝしかな　忠成

瀧下款冬

瀧津瀬の岸に[illegible]の山ぶき　為忠

八重[illegible]瀧津瀬[illegible]山ぶきの花　忠成

瀧津瀬の玉[illegible]みしけれ山ぶきの花　顕廣

[illegible]瀧つ瀬に咲山ぶき[illegible]　仲正

咲[illegible]の款冬は[illegible]　為業

岩間より落くる瀧の数ことに霧れて雲の糸の緒
為盛

瀧津せの岩こす浪にあらそひてまさるや峯の山吹の花
盛忠

風ふけは花のかけし稀なれは岸に落る瀧の白浪となりける
頼政

沼水杜若

色深きあさかの沼に生わたりていくらの花を色を見せ
為忠

いさゝめのさゝれかなやいかなる人のそこに見する花はさくらむ
忠成

みさひゐてかくれと出ぬ沼水をところせむる杜若かな
親広

人も無きあれたる沼を誰か見よと思ひて咲ける杜若かな
仲正

春深き沼のいはかきにみえて花咲にけるかきつはたかな
為業

ますけ生ふる野人の沼のみなれさへ咲こめて見る杜若かな
為盛

かれ沼ゝさく何さくらの沼に咲つゝましく沼の色に咲き(?)
盛右
頼政

杜若ありし花さくまゝに生ひぬるところにかへもえてはかるかな

池岸藤花

為忠

うつれ池のけの藤のなみ花をいつし浪やかけて折るらん

忠成

藤のふれ咲をみしより思ひのさておもてなりさのはけさり

顕廣

紫よ白ゐりける藤のふれ池よりかけ浪をやかるらん

仲正

こち風にみなはの白玉吹かけて光をそふるいけのかはなみ

為業

むらさきに池の藤浪咲ぬれはみなのいろかはりけるともへみ

為盛

久しきれ岸に咲ぬる藤なみやまたかさの池のうつるからぶね

盛忠

藤の花咲ぬる時は池水にむらさき深き浪そたちける

頼政

藤浪のむらさきふかくにほひそえいそ池のけにまされかゝりけん

藤花三月盡

ゆく春とたちむかふ身と藤にかゝりてこそうつりそへてかの露のなほ

為忠

忠成

春はまたこゝろひのきもしらる梅か香の花の色の匂ひはうれしき

雅廣

花もまたみ雪こそ出かひとつゝ霞やまつにゆれ行らん

仲正

行春をまちひさしわか床にやすらふや霞のたちて留まと

為業

行春の行へをとふ海せは松の藤なみの面やうつし

為盛

草枕かりの旅の床にまたしいて暮ゆく春のなこり惜めん

盛方

今日のみと暮行春の行きなき夢ちの里に藤ゐる（孫ラクビカ）栖ハ

ゆくてにも花の散はしらぬ今宵ハ春にもまれぬらん

頼政

夏

山家首夏

若葉さすなちりは垣の花をかれなめて春の名残をしのふ里

為忠

山近く家ゐしせすは春過てまた咲やゆ花を見すらましや

忠成

雅廣

春くれて花の久しく深山辺に勝れるにかへらんとする

仲正

あ川来れと見ける草葉の露のあとはやみよゆきをき（さえす）の里
為業

村と梅ゆきと霞たつ山里は村まししれあやまれ花
為盛

見渡さは垣根の雪ふるかりそそむくると見けれ夜ハ來ぬ
盛方

夜あけと見ると見えも山里ハこゆとくまつこしける
兼政

孝村卯花

いはかきけきは甚ぬる人はきこえさむ大原の里
為忠

卯のはなのさかりなりけりこのむらや庭もせにさらす布とみゆるハ
忠成

あはれいつたのさとの卯の花ハみるかひあるそ里はなりけり
親廣

卯花のかきねを雪にまかへてやいそき出ける里のをち人
仲正

むらむらのかきねのひの卯の花やゆふひのさすやせはてくるの布
為業

ふる里はよそのさかりときれぬ白雲と卯の花咲る里の垣根（ところところ）
為盛

卯花の垣根つゝきのしらなり絶えぬるのよこそ道ゆき

盛忠
卯花のさかりなりけり五月まて白雲かゝる峯と見ゆるハ

雲間郭公

為忠
なか〳〵に聞もまとほし郭公雲路をわけて東雲の空

忠成
さらぬ空にほのかに聞し時鳥雲井に鳴こゑそあかなく

顯廣
ほのみえてきえなる見えず時鳥あまの雲ゐる東まてなく

仲正
時鳥さ月まちえぬうかりきき雲るむかしまて出見えてよなく

為業
雲かゝる峯たえまれに時鳥きけは心そそらに~~お~~かゝれる

為盛
郭公山のはつかに雲間より鳴こゑはかなくあかす

盛忠
郭公はるかに雲路よそに聞て空人の方とそにおとつる

頼政
時鳥こゑはかりこそ見えわかれ月を隔つるこゑそきこゆる

江中菖蒲

為忠
あやめくさ江にこそひきてまたかたみなる水のふかさに年をふる

ゆかしくは来ぬ人もけふみよとてやさはに生ふるあやめひくとぞ
忠成

みかくれてふかくはさはに生ふる菖蒲草ひく人のふかきねやあかしつらん
顕廣

人しれずふかく入江のあやめ草みちくるしほやたかくなるらん
仲正

難波江にあやめをさしてふきそふるあやめのねもいとゞなかゝり
為業

みなせ川たえぬみぎはのあやめ草ひくとぞ人はたちかへりぬる
為盛

みつ縄にまつはるあやめ草ひくみゆるとみすをかけつゝ
盛忠

はしまにおふるあやめのながきねをひくのきにかけてみるべき
頼政

あやなしにあやめのねをも今はおしみてひくらん人ぞつれなき

門田早苗

うらやましくもふく門田にまかす水とりかへるとも今めづらしき
為忠

我宿の門田のさなへ今とりていはゝせをなりまちてこそ見め
忠成

かりほさす風にまかる人とおもふ家のかりてうへしむらなへぞ
顕廣

仲正

かはとよりみ川もわたるみつはいはりよそひかの小田は早苗（とるらんよ）
為業

さなへとりかとさは庵にいらすてこなくらまりいそく絵のを
為盛

はるれハ梅まつ程ふ雨よりあけハ門田のさなへとりてん
盛忠

ゆかとのさとのまさとはふれハあけつるまにさなへとるなる
頼政

小夜ふけは山ほととしそふれ夜まもなくとこの小田のさなへ（とるとし）
為忠

曉更聞衬

あかれぬるおきまてに雨ふりはこのまよりそとしのけのまつかせ
忠成

きのふまて川をわまのけのこのさたおくるとさみたれのそらはみる
顕廣　（コノ一首、撰入）

（コノ歌、千載集ニ撰入、作者ノ歌ナシ）
なつ山は風ほとりの松とよくつきて海の風をとは雲のかよひち
はましけみをくらのやまにいりぬれはあくるもしらすとまりとをする
仲正

河のほとりのよのみえはあきしのの山のすそかな
為業

山の端に月の入かとみえ雨はれにかすみのこのまの月かな
為盛

小男鹿とめてあはせてやまをめくりゆけはかけの松のかけかな

盛忠
あけぬとてやまたにこそて湊はつらんと舟とめてさわかり（頼政 せく）

旅泊夕月夜

為右
夕月夜に月影はらふつまり舩間もなくよそにふかるれ

忠成
さみたれはあしやの沖に塩みちて枕にかゝる旅のやと

顕広
さゝれ小松とはぬ浦に舟とめて浪のまくらに独ぬるらし

仲正
夕夜はとまの蔭にも独ねられくあすかとけれ波の枕や

為業
さゝなみや松まのこそやあまの子さへのしまにのゝ漕ちるらん

為盛
夕夜のあくとふるとのをよろこひぬ夜は縫てまさとゝ白浪そ見えし

盛右
夕月夜にいつしかやねまち世はいくかにありぬなははわさすて

頼政
ゆふ露てたゝくものをさそふ夕夜にゝ池の小川にかさまさる

寝床水鶏

為忠
うき夜ねの夢をおとろかす覚すなる枕たゝくる水鶏やたゝくなる

身のうさをおもひ侘て眺むらん人待かほにたゝく水鶏そ
忠成

夜〳〵色ありこれは水鶏のおとならんよひ〳〵人はとはぬとはまて
那廣

これ緑海のかりそめ人なりとえしれ世をたゝくも水鶏は枕にかなれそ
仲正

東人をおもひ侘ぬれ里まてもたゝく水鶏のさ夜ふかれ
為業

身のうさに待覚へみをかぬ中とあるかるゝすめの水鶏そ
為盛

盛方

さよふけてたゝく水鶏のけはしさすか待あらぬ人やかはらん
頼政

夜〳〵色は水鶏の音をとまりかくれの枝をたゝけぬありさま

叢中螢火

風そよくあさちまじりのかるかやに螢とひかふ河のなかれ
為忠

忠成

去年は草葉をさらく夜もすゝれはまされく螢まかりん
那廣

大あらきの森の下草分しられぬ秋の原よりたつ螢かな
仲正

風吹は光さためぬ螢かれさらぬの草葉にみえつかくれつ
為業

浅茅原そよく露とかくれあへて螢のかけよみえぬるかな
為盛

草むらの螢の光夕されはかれたるかすゝ人よもてらしける
盛忠

一首欠

夏むしのとふひの光はまよふなる毎よに身をやくらむ哉
為忠

毎夜鵜川

かゝり火のみえぬよもなき大井川同しうちにや鵜舟さすらん
忠成

夜ゐの月のかくるゝほとにかゝり火のいさよふかはに見えわたるらん
顕廣

鵜川にはさつきの夜とかゝり火のそれはかすかにのかけ
仲正

鵜舟さしのほるかせいくよなよなのこゝろとをりのあつん
為業

かゝり火のかけともして大井川ことこと鵜舟はなかりける
為盛

大井川さるゝたなしらさるてらす鵜ともいはせさるらん
盛方

夜をかさねとるせのかゝる鵜舟のひかりをとはすかりかゝり

かけも猶青葉ハほさぬいつみにて今も世をへて手なれハさらん
兼政

深山氷室

夏野のゝ花をなのみて家ゆらん中なへの山氷室ハ春のかなかを
為忠

家居へちかきも夏氷室山をみよゆかぬ人なかりけし
忠成

夏なから氷れりけれハ山ハこのよその心地こそすれ
顕廣

たかせ山氷室のわたのうみにして秋のけしきをとへかりけり
仲正

あつき夏ゆれてもみすし氷室山身ハあつさかしく人のしらん
為業

夏としあれさ人の氷室にたそとへいそくひつきに後すきるらん
為盛

昔よりしらさきの於ゆきぬなる氷雲（室か）の山はちからに行かよ
盛忠

あつ夜の氷室ハこゝの春をれハけふこそそらに入るすとしたる
兼政

樹陰納涼

かけの日のてらしハの木陰しれ夜とかりあかぬとこそ秋かう
為忠

忠成
あやしくも荒れし森の夕風に秋来にけりとたれかしるらん

顕廣
風そ吹まさるらし吉山はいくへの雲も晴しよかるらん

仲正
さけ鳴るはたちぬ夕暮のむくらの葉風にそよく風そ

為業
松原やうけのゝ舟人にむれねるは夜をさそひてなとさひしかれ

為盛
秋やとのそともかはらぬ薄なる蔓の露のまはしはしもなくてまつ

盛忠
すゝしさを柳か陰に風吹てしらぬもよそにすゝしかりけり

頼政
まてしはし木陰残夜のなこりにはしく秋そとくたちかへりなむ

池上蓮

為忠
色くにうつろひぬらむ花にいますかたまさるの池のかゝみなるらん

忠成
玉乃るよ浮てさゝまする池の蓮の花とみるかも

顕廣
にこりなき池の心をあらはさん今そ生なりときふける

仲正

隙もなくふく風さへそさらまもともなし岩にハ風涼

為業

まとゐする日にゆく水のさゝ波ハ池の心ハ涼しかりけるよ

為盛

夕されハあたりの清水風ふくとさきまはらぬ身　いかに

盛忠

かけもすく露ハけさ(も)とをらす(を)ちかへて床と涼し　くすとた

頼政

あさましく花にハおしなへて涼しきこゝろの里の底に色ある

林頭蟬

夕されハ木末の梢ふきまて木のまもなく蟬の鳴く

忠成

みなしもてともと梢にとまりてなくこゑもしく蟬の鳴

頼康

ゆふくれは木末の梢とまりにかゝりて声すみかのなく蟬の　なく

仲正

声聞ゆとしく妻木にもゆくと木のしたにかそな蟬はなき　けり

為業

夏山の蟬の声なく木末の梢よりすゝしきかな

為盛

殿のわたり夜風さえてまたにおくる上て擣の野風を守るそえ給は

盛忠

夜山よりてらすも螢の光かはやみ捨すまてもみゆらん

頼政

浪そ影の色のみえつゝまかくるゝ末にのかけも螢みえく

河辺蛍和歌

為忠

いかにへのなきとひゆく川の瀬にをちても命の色見えけるらん

忠成

川波にしもに川瀬にかゝりて年をもすゝむ色を命をもたらす

顕広

川の瀬にゆくての影やさすらん螢なきそつゝまん

仲正

見えぬとも影今日川上にのけさゆく所に螢のかけもなる

為業

蛍の音も見えさし川の瀬に瀬にいくさひわたる風をさそはん

為盛

川たるに風に見えて行まゝそまもまた光さえけり影を用やすき

盛忠

やまの宿さやし川の瀬おゆきてすこし風に見えつゝ

雅政
旅人のゆくなれ涼しさそてもみる清水の風やとふよる

泉邊初秋　為香
いはもる水風吹てしほまふかは秋風のをとすてゆかむ

忠如
秋きぬと苔井のみつにいはれもしまふてそまさるよる

雅廣
松風の音は秋そとしらるゝにこゝろをそ風そさはし

仲正
まさにふく涼しさふく我袂のかほる秋の風哉

為葉
風のおとに秋そしられて松原吹せみの声のあらたなる

為盛
声よりもさきに風の涼しさは秋のはしめの風にそしる覧

雅政
涼しさし清水声の先へて秋風にうつりし秋の風そ吹ける

七夕後朝　為香
別りをさしかんねと七夕の今朝のこゝろを思ひやる覧

忠如
七夕のせきてもかはぬ涙にはよし今よひの河せに

顕廣
七夕ハ雲の衣もとけ通さのよやよハ霧ふかき覧

仲正
ひこ星の人の契りさと渡りあさの雲上をまつは

為業
秋風もみんばかりはけふ七夕の契りまちけんたハ

為盛
七夕わたる天河のはやかはら舟出ハいそきこきけん

盛忠
七夕の別路とくたに心わくしのひもとくまし加さね浪の

コノ歌他本デハ細字ニテ書入

七夕の秋の人かたを待ちてけふし今細節やとまつはやも

親隆

庭萩

庭の萩りふ花の錦との霧てきる秋ぞ玉まき紅

為忠

立よりて誰か見んまし庭の萩をたつねて旅ゆく風と

忠成

風わたる露もしらるゝ秋萩も風のけしきやかはるらん

ちる

顕廣

多くの野への萩もつゆ庭よりうつせる錦なる秋

萩

仲正

為業
我宿にひとり見んよりも秋はきのうつろふ花のゆくゑをたれにとはまし

為盛
庭のおもに露は玉しくいとゝ花の咲て見にそうつるは

盛広
あさ露をおきそふまゝに玉しく[illegible]庭のおきな

雅政
やまもとの[illegible]花の[illegible]人[illegible]やとの
（村荻）

籬中女郎花　為広
酒のうちにたにまかせて女郎花ならすゝみぬ人も[illegible]

忠成
まかきして[illegible]花の[illegible]

雅広
我ならぬ人もこそ折れ女郎花たれにまかせて行のまかきよ

仲正
あさ人のをりもてまふく女郎花ませのはとわくのけて

為業
[illegible]行乃ませゆひわけし女郎花よそのまかきに袖もおらひこゝろせよ

為盛
女郎花ませゆひくれてのよそめのみまつ秋風になひきやそせん

盛方

思にはまよひし物を女郎花行路まちてみはやまさらし

兼殷

女郎花いかにそ風にふかくとも見えぬ人のこゝろなりけれ

野径薄

為忠

旅人のまねきをいくのゝいと薄乱れやせまし夜の袖なれ

忠成

あさ野ゝ尾花をまねく分ゆくは所露にて風そまつ

邦廣

花薄なみよる野辺への夕暮はまねく人をもなこそ風ふかりけ

仲正

朝露よ野辺への萩原分ゆけはぬれたる袖もかはかして野すゑならは

為業

花薄風のまにまにまねくとまねく野辺の人とも見えぬ袖

為盛

何せん小萩もとよす花薄まねきそいくの人まつ絶

盛忠

かつくにまねく薄のむらぬれても秋のゝらをは尾花そ久しかり

頼政

花もちもねならぬ秋の虫はねにまかせてなくらよのは

風前刈萱

為忠

ゆふまに下葉みだれて行かるかやのなびくにあくがれ紀はあそ

忠成

かきよりに風ふきたちぬ刈萱はねそよかれぬ夕まくれかな

頼廣

さゝぬまにこき中ゆる刈萱の露みだれぬまよふこゝろしの風

仲正

吹迷ふ風のすさみは刈萱のかゝるこゝろのまどはざらなむ

為業

風吹てさが山の原のかるかやの乱るゝなかにあきのゆふぐれ

為盛

さゝぬまに乱るゝ木見ゆの刈萱をいとゞみだるゝ秋の夕風

盛忠

刈萱は緑の乱れ風まかせたえぬなかにや吹よまかせてまひきをそみる

親政

よのつねはまよふかやのも秋風に吹ゆくふしきみだれかゝるかな

雨後蘭

為忠

村雨しはれゆふへ夜そ月ハ野毎にやとりてまさとかりかね

忠成

村雨の名残露けき夜そ庭多と面ひと月にそしほる哉

頼廣

夜穐三夜の月小林に名りきれしはなのそらのそら

仲正

咲ることに月夜ハせしゝ夜穐今朝来てこれハ枝も露けき

為兼

晴る夜の庭のしらしらと秋の月ともにぬれぬくもるハ

為盛

文様の〻と今朝きて見るは夜穐よのまに毎にかそ露ひまなり

盛忠

そよき川風夜にたまさかの夜をかすみすもきくにそ川ろひまなり

教政

来てこれそ毎よりの名残り夜穐露ふけ〻夜毎に花もせむ

清家萩

為忠

あしきに尾上つ〻野もに中くに枝きれし風そ都も尓ある

忠成

まとゐして千のきしれ〻色々そまとかきて八重よの人にまかる年

既廣

あやなしなをりとて秋のこゑさゝハいさきていれ萩の上の露

仲正

あかねさすとやゝ人もこそえくれとわす人も萩の上風かなり

為業

阿きハゐると思れて萩の上を吹こる風のおとはつれも

為盛

風吹てまくすのうらはきかれとわすハもよしや

盛忠

萩はらつゆおもきにあまうへ人たゝむ萩吹風のちるも露かな

頼政

萩の音をめしハいかにふとこそかぜとなりハ人のこゝろとそ思ふ

羇旅居

為忠

誰とてもにあかぬ猿の山をこゆれや衣ひき局つて涙せむ

忠成

草枕かりねの萩に菱尾て露けさまさるまひ衣かな

顯廣

あさちはら夕やかるきをとへ人まれきえ枕のいとゝ露けき

仲正

わひしさのまさる庵に渡世首途しけき猿の声かな
為業

我やとり猿なきそふる夜もすからさもなかれけるかな
為盛

いつれ谷峰なかしそかれよ雲井さるゝにあはれかりなる
盛方

夕暮はやまかりなるそ峡なる猿もひとえにいふなれ
頼政

身をはなれ猿の声する庵にはなきひとにかしこまる
嶺上鹿

為忠

雲かゝる巌のみに鳴猿は風のつてにそ峡なる
忠成

小夜更てくらまの山の巌高しおもへと猿すかしく鳴なり
顕広

峰の猿の猿かたに鳴猿はとえぬ斗に声そきこゆる
仲正

夕されは巌のはさきに声たてゝ鳴なる猿の声
為業

たにふかみさきの山を峯を分て山の峯に小猿なくなり

いかにして秋来よりなくとやはんみかね山のこゑのさをしか
為盛

穐風や身にさむしろはしきてかひなきのあとにねかなく
盛忠

妻こひて鹿そ鳴なる夜より猶て峯の嵐の身にもや寒らん
頼政

杜間紅葉

わしまて皆色くにみゆるに紅葉するきるや柞あしもあ　杜
為忠

うすくこく紅葉ちるなり紅の匂ひよるあるころとそのもり
雅廣

もみちもの雪の月影とみゆるにちらされ落葉の秋の夕くれ
仲正

紅葉ちるかこ屋れ柞みしよ世は錦まとけの色そ見えれ
為業

時雨にも染るみかの山をみわたせはいはせの森と紅葉するなり
為盛

秋きなしく人はいはけ錦しく紅葉ちるなるきれ杜にちるも世なり
盛忠

露霜をそめきにて龍田姫錦へと織るころそのとり

頼政

みとり成る袂にちれは錦かとみれは花のちるのとみちて

苔上露

為忠

あさまきれ苔のむしろにおく露はみとりの玉とちりかゝれる

忠成

岩の上へうちされたるんとみる程よ露をきかさる玉ならかと

顕廣

ことりおほき苔ちにちらす白玉ハ秋のみそれ露のをきさる

仲正

苔の上におく白露の暁をさそふ風に玉ちるとひけるかな

為業

山賤のとものゝ庵の苔の上におきて玉とそ露のおもふ那

為盛

まろの月やとれるとやうちむすふ苔のむしろの露のしかしき

盛忠

草枕やとれる露をけさみれは苔のむしろにかれそひにけり

頼政

白露を苔むす庭にわきて月ハあをを見けるの心地こそすれ

田家霧

為忠

いかにしてあともみわかぬ霧になるこひくなる衣かけして

忠成

山田もる吉川のさとの霧あれハ妹霧にこそ立居てそけれ

邦廣

あさ霧に鴫のかはことをみけゆけハ人まてきそしてさそ見え

仲正

夕霧に山田もるくとまつめまはむかそてみてぬ庵かなり

為業

海近きあかしのさともみえぬ秋霧に鴫ひきなかす波高けして

為盛

秋霧ハ山田の庵ハたちこめてなるこに人あるとそのきこえす

盛忠

をちこちをへたつる霧のまよりハみえさきの庵のかたの庵隣

邦政

霧こめていつとも見えて稲そとる人となりけと山田と引らん

垣根槿

為忠

むつまじとふするれかさきれあさかほハみなかるとてもさきかかるらん

忠成
まちわびの垣ねに立とひてくれなからかつてあさ顔の花

顕廣
あさらしや荒れにけりなる人なくと荒川の垣ねの朝顔の花

仲正
阿さかほはいくよの竹にまとはれくるきよをとえまでをまれ
ありえれ

為業
八重むくらしけれる垣ねによりなくと咲くなりけるあさ顔の花

為盛
あさ顔のあるかなき萩のもかことて賤の垣ねにかゝれなりけり

盛方
たれ見ん露より先まで山賤の垣ねにみゆる朝顔の花

頼政
垣根には何そてそよ竹にてあさかほ見えよる阿さかほの花

源兼昌

為忠
阿もひとや中に見えむの朝のまよりさしつるかけやすら籬

忠成
あふ坂小駒川とをく月かけとやまちを猶に小車をならし

顕廣

とら月のあくやうつゝと須磨よせ九のむら枝みけかさぬきぬ

仲正

あふ坂の関のこなたにさよふけてかへりゆく月かけの駒

為業

夕けふり関の杉原霧晴て今そみつけるもち月の駒

為盛

今月はよそめとみしをひとちを逢しあつまよりかきり原の駒

盛忠

さよふかく小ふこを出く望月の駒あふ坂の関をきるなり

頼政

月影はそしらぬにありやまとも駒のわたくをあふ坂の関

濱邊虫

為忠

浪之寄濱松か枝にたえく虫の緒をやつれかゝる秋のかさみよ

忠成

舟やとのよまかなたれを主のこゝちしてまつむしの声さきりくなる

親廣

秋風にまつ海の礒の松むしハ浪とともにやあはれ鳴らん

仲正

松虫のよるのよりなかく安西なる松まくれのいそさきより

為業

なく虫の忍ふ袖にあまる人との秋かな又ハあかすせられく

為盛

浪のよるからしかくそ宇田なりの身をうきつしまの松虫の声

盛忠

今こんと頼めぬあたんよそうのまにそて松むしの声

頼政

おのつからあるえし海の波に浪こえてハかにしむ虫ハ声とそ鳴なる

水岸菊

為忠

迴文

しきのころゆやそこにさけかとましなとかけさたよそ雲又ハ
ゐきく

忠成

庭さよみ岸の八重菊なけされて池の岸波折りかすみなり

親廣

水為れをそへてけの白菊をうけれ露をまかへ浪かな

仲正

時わかぬ雲の浪たえて見るまて池水にうつりてさけるも菊

為業

大井河よるせの浪とみるまてそ岸の白菊うつれ咲にけり

為盛

池のおもに岸の白菊うつろへともなり

盛忠

みなふかき数かくりせは白菊の底にもとえくや（座主）（いけのそこたちもはなさきにけり（一本ニ依テ補フ））

（已上両一首欠）

十三夜月

為忠

あきとえは今宵の月のなかりせはゆけりまてもまちかハ

為成

川霧はみな今宵の月をみし後をわすれしとひとれぬ知かりけれ

顕広

きえまりいまらさよをえみて年まてはあきは長月の月

仲正

かそへてはとらにあつつくハ毎秋に光ハ世にもてる月かな

為業

室ならに今宵の月をみるやとよそにあれぬれは雨かちの空

為盛

昔よりなにかくれぬる長月の月をもみたつ河辺のとせよ

盛忠

いつれはみなく今宵の月影の昔にはまさる色かくるらん

頼政

としそのみさかりとみゆる長月はゐまさたて年まかりけり

遠郷擣衣

為忠

東ゝ見かゝき山かくれ衣うつとをちの里はちかゝりけれ

忠成

猿沢はそとをちの里に月見て我ちゝかかる衣うつなり

頼廣

遠山ゝ実田なそれさよ砧を隔てきこゆらん

仲正

夜ゝ見かゝそとをちの里に打ほらきぬたの音の東路のてし

為業

おきわひてとをちの里人暁の鐘しきてぬとて砧をうつなり

為盛

秋風や身にさむからしよもすからとをちの里人しろとうつなり

盛忠

夜ゝ見をうたゝ見せ女の居へやわちをちの里人衣擣らし

頼政

まれにみすかとみやあらんかる衣そとをちの里はうらむらむ

閏九月盡

為忠

長月の日数をそふることしさへなほそゝ秋のわかれまちくれ

忠成

秋ハ猶またくれぬともしられともえぬとをしむ

邦廣

惜めとも今年ハ秋の行きされてつのへにむまるゝそ

仲正

長月のけふ暁ハくれぬれと秋をあきたにすき行きくれね

為藤

あかなくにけふまてハ長月の末のこる年の婦に全をと

為臧

河風にけふもはしとまる長月のくれゆく年の秋のくれかな

臧忠

長月のくれぬる年の秋またれ暮ぬる年の行冬てとまれ

輔政

長月のすゑかさねぬる歳をへて行秋はいつもまよふらん

冬

初冬時雨

為忠

年を経てふる時雨とハ松と人と毎やうけさせぬつきかな

忠成

神無月きつるの山を色なきて時雨とさためこそのハちりぬる

顕広

名よりはことゝその森と神なひ時雨しくらんときこゆる

仲正

宮のまへにむこのりと時雨して洞をもわかぬ名は秋なり

為業

名をこめてもみちにちるは神なひの森よりまたあくぬけさきあらし

為盛

いつしかも名におふ森の紅葉を見せ染むる色とそしく時雨ぬれと

盛方

名にしおはゝ時雨のかきそそめてまたなりとおもふらん

頼政

さしてやは名のうちあれはさくら井の森をしるしと神の時雨なれ

橋上落葉

為忠

いなりやまあらしふきまくもみちのかけ橋をゆくて紅葉は散しくらん

忠成

紅葉ちる谷の岩ほにけるをいま山風に落のかけ橋もみちに不見

顕広

きそちなる谷のかけはしふきたえていかにせよとや紅葉ふる人の通路

仲正

あれはしも紅葉ふきしくうち橋を川瀬まちりにゆきとまる

為業

けふとあれはてぬ橋をいかにてわたる紅葉ちり渡るらん

為盛

紅葉散嵐のこからし吹そめて谷のかけ橋小きをそなり

盛忠

色くにそめける紅葉のくちつもるはつしはつき谷の枕橋

雅政

とみちらす此八みかは八橋とゐつゝも見えもえらはれとそなり

寒庭霜

為忠

庭とせのむまふはらのうへよはけ八（なり）とけぬしもそかし　混本歌（一句不足ニヨリテ御入ス）

忠成

庭のおもよもきかれたる枯まとふく霜けもそおきて見えけれ

雅廣

庭の面はおとろへたる枯まとふくれたる霜の枯のねまゝ

仲正

さく形のあハ宮もりハ中くに庭ひろふるそ枯ける霜の朝

為業

庭とせる霜かへり枯ゆく霜はれてよのまとは志ハさくらん

為盛

更とみかる庭のこ草ハ風さえてくれにと結ハ霜そおける

盛忠

錦かれけさえける庭におく霜をのこれる菊の色みるとこそ見る

形政

初霜のあさひにあへときえぬハ庭の草葉そさへさえ渡るらん

囯上霰

為忠

板屋よりあられまとふる冬の夜ハ玉の上落をかそへてそぬる

忠成

あられ降る草の庵ハねもせて寝屋のひまより玉を数ける

顕廣

空こせも見えぬ夜のこゑハ板屋より枕の上に聞えける哉

仲正

吹さるハあれたる宿ハ軒よりも袖ぬれしみまの上にあられ成けり

為業

ありくれの板屋あれまのおちくる音ハ玉の衣とこそ数へける哉

為盛

いとゝしくかたしく袖そさえまさる板屋まはらにあられふる夜ハ

盛忠

梅か香よりわかれし夜ハ今年そこみさむしの花を見るよ
雅敦

さむき夜はわかれの空をさそく世帰るゝの梅のくれなゐは

松上雪

為忠
いにしへをあけてまつらん白妙に雪ふり松のふることに磯の松

忠成
雪ふれハ三家いそしろたへのむすひ松花咲よりもえけるかな

雅広
降雪の梢ハ松につもりて梅さくとそて見ゆる春の山

仲正
あさまされ松のうはゝ雪はみむ日数ふることそ高まされける

為業
みはらの雪ふる袖と見んすゝ世は尾上の松と花そ咲なり

為盛
あさまたき雪ふりきてそ久しかるこ緑との山の松のみとりは

盛忠
白雪のふりよ千代ふる松かれ花さくてらす袖の山

雅敦
きさらきの松の梢のむすひ井のさゆるハ雪のはるかな

濱邊葦

為忠
かとめゆく芦まハ濱の夕浪にすゝふかれの音そせはり

右成
はきしも世をきえせぬ雪の白濱ハ浪よる河しのあしまかけり

顕廣
冬されも芦の濱のあしの孫の芦かうそてかくれたいぬなきほ

仲正
冬かれもむれゐる田鶴にさそはれていとしほ浦のあかり

為業
沖つ風吹上の濱の芦わかよまひて見ゆる岸の末浪

為盛
芦々まれ経かひかす濱風に芦まし芦れはそよく

盛右
吹嵐にみちくる濱の芦のかハそれてそれてみえぬまて

頼政
難波江の入江の芦わ芦かれもの芦辺くてあとかくさくほ

暁天千鳥

為忠
有明の月の入月みちしほりこハれちとりたちさわくなり

忠成
冬寒を夜なかきの月さえくさかせ河原にちとり鳴なり

顕廣
あらけふさえわ浦の鳴音に浜はそひて千とりなくなり

仲正
さよわ浦に浪の音もせ明かたよく鶴る月にちるまつ之

為業
浪よせてしまうく夜の浜風にちとりさえあく鳴なるの夜

為盛
あふは雲ゐるうへ之夜千とりさよなかの月のまゝふく

盛忠
鳴ことにすまやさむらんとあまの霜夜の千鳥鳴なると

頼政
あれまけや名にあつよし浪あれもあくはまのちとり哉

谷川氷

為忠
とちられしきひの中山風さえてほそたに川に水こほりけり

忠成
谷川の岩とゝろきし瀬はゝの音きこえぬ氷るなり

顕廣

山深や谷のささ水ほそらかく岩に川浪を今は音せぬ

仲正

岩間とち露をもらさず谷川の流れわすれハこえぬならず

為業

流よに成れとと見しをほそらかくみ巨山の谷川水

為盛

冬さむみ峰の嵐のさえぬれハ谷の川水氷重まさりけり

盛忠

冬されて絆とほそくよさらまて積つらゝ岩間の水

敬政

中々にたえ／＼く谷水をうつしてこそ尋る岩にきす水の音をきく絶之

河上水鳥

山川の岩間の流らかれ多くきみちあへき井の東の部

為忠

冬の夜のこほれ川浪と見渡せば雪にうきねかとも鳴らむ

忠成

いくよしと見えぬは流しきれ年内す小枝のさかれけり

政廣

冬の夜は岩きりとをも山川よむきあくすましれのつるハ

仲正

氷井てうつひれ床のうへまてや相風にかけてのこさゝらん
為業
山川の岩せにせきてかけての秋ハすきぬ網ゐてそしけり
為盛
よそにかくみえてはよるにあつる川浪よ いつるそらみえらき絲之浪
盛方
いゆきてさりくらん浪のよるやほけれあさに打なてのる
頼政
河中網代
為忠
わろ末にうち風かよりみ吉のとけりきまたれむなしれ
忠成
うきくさ宇治の川 網代木によるもれの海と見とくらすい
親隆
ひをよるやそこらの川の浪よりもなくるさすきりあわけかれ
仲正
よるひの網代の袖よる袖かりんめやそみるなくきりんとそ
為業
河海にやうてをみてもむ清はらにうつをゐもとやうれ
為盛

たなかみのせゝのあしろによるひをてきえぬはまさる浪となりけり

盛忠

あしろ木のうへはさやかにすむ月をまちてもひをのよるかとそみる

頼政

時雨もさそひてそ来る網代木にそれともひをの寄るとみえけん

月前神楽

為忠

よるまゝにしまゆきえよむろひろてきくの月にうたふなる

為成

おとしらしあの子よりと月影よあさくらて霜をて篠のおかゆる

顕広

月よみえ庭火のまへの笛の音を雲ゐにすみて空とをるなり

仲正

宮のとのゐにひまなくせする晴くもる月影にさやけきところかん

為業

かくらきの声にまきれていとしく照月影のおもしろきかな

為盛

あまてるや神のみまへをとけみれはさやけき月は榊とる袖

盛忠

さえ渡る月の光のしもふりて庭火そ白くみえなる

頼政

月影のさやけしをりてそおもふめり何せそらねへの心さえて

晩頭鷹狩

為忠

はし鷹を今はとりとおもひせしや立帰るさは峰をかりて

忠成

夕月東入のさえてふきさてきし林の鷹をおそせけるか

顕廣

かりくらしこゝとまれをてそ鷹はなれかはらの野のかとけさて

仲正

狩くらし入日と共にそ鷹をと山のあらしにあはせつる

為業

夕されは野寺のかねのひゞきにそころする鷹はかけしあへ掛て

為盛

狩人の御狩の鷹のりさを杉なきれはその音よ名つけ

盛忠

名かゝる御狩の鷹を何を世ははかりの外になをと行らん

頼政

はれやる衣のとひもつそて鷹のいと来とみてはた暮覧

為忠

深山炭竈

三川たゝや引松山はさかまは煙立へせそて頭に数

忠成

うちしける尾のゝ炭竈の煙たに○きゝてしれこそ立のかりなれ

顕廣

雲間よりかゝるかゝる煙こそ山峯はあさきに炭やくらん

仲正

雪消は大山かさそのまゝ久敷は炭竈のけふり成けり

為業

奥山にやくなる炭と炭竈の煙と人にみえもせし何た

為盛

見るさへは煙たなひくうき心や杉はさ山の○はしみかま

盛忠

絶もして人とかよはぬ山中にたれすみ竈の煙きつらん

頼政

杉月つるみ引来と知らぬ杉の山にまれはみかまのけふりなるらん

閑居埋火

為忠

埋火に花つきけりとみおいて冬の今朝ちりのほかにあたるらん

忠成

冬されも雪気より埋火のかつをれぬともすゝろには

顕廣

埋火を見添りみの友とてあはれすまゐのわさハ風よするせそ

仲正

さとにある東まての埋火けぬるまて老の袖かりとおもふかな

為業

埋火を気さへつくる夜てもくさしてハされいさゝよこされ

為盛

訪ひくるものそなき宿の埋火やまさにこかるゝたくひならん

盛忠

松風の情たえてそさひしかる山里ハろと火なる友しあけまし

頼政

さゆる夜ハねさめくしそは埋火をそこそみておはせ人しまけ哉

船中歳暮

為忠

年なみハそこゆるきこしいそちつまとはしの浦によるよる

忠成

今宵しもとこの浦小泊舟とめて年よある年のゆくをとゝまる

邦廣

たつた川浪をたてゝそかへるなる年のなかはの紅葉さそふらむ

仲正

月のはなれくもりなき舟のよひそらとそこれみるかな

為業

むらしけるさゝみの浦に船よせてこよひあかしも君とまれ

為盛

むらしけるさなひまともえてかくれそゆかわかれ会雲

盛忠

むらわかはなれをこえゆくと漕ゆけと浪よと霧よ都かな

教政

故郷へこえくそとゆきも霞よと霞はれけれもとしとえは

戀

たへたる波の色させかわていとめつこみを
くつしたるかな
春さめのしつくの山のことのはをもいしをめつるけふにも有哉
おもいあまりたくぬまたらま
みせかほのけしたなかに
しぬけしきとてもかな

淺始戀

三輪の山尋ねてのことをもちはらへしかはなそ見える

為忠

つこめとせきしあへのはなみたかは
しらしせとめつるけふにも有哉

はつ花も漁のかみのみはつれなきしはるれ

忠成

○以上四首 他本ニヨツテ補入ス

邦廣

しまる
きふめやたきの下水したくのみきこを
めしノりたえぬこゝろを
おもひとをはさみかしるへにしられにまかしきことこそやかたもなさ
なかくになにとていひしことをとよきかけはかくもさもはけなるし
いとつてにかけつゝひてやわかこひのたくかたはしといひ聞わたるらく
をとは川いはわたなすけいはなみのたてゐた
ものもおもはさいまし

人傳戀

あけれてたえぬ年ハ是紀まる今をかゝせ山家の月

○以上五首、他本によって補入す

為忠

ちゝせをもやまことのをそし安しらぬをそみゝ君をとふと

はけなかりし人さへ今ははゝきなれ多る出へきかへしまけれハ　忠盛

被返書

ちひつよれて返れる文のかきさらに見ゆるてもあらぬ君なれ　為忠

いかにせむかへりてひまんかけなくて名のみつたへしふみしかり　忠成

玉はさハ家むすひのよかりねともやとろをつんぬかひきかな　顕広

難波かたあしてまよひける玉つさをみをつくしとや人も見るらん　仲正

玉章をとかんかたとは家むすひのゆくるもそなき　為業

かゝるをまつるたひひまをつゝすんなかしけとめさぬをと　為盛

むすひめとかへりて返れ玉章にとけぬ心のおもひをそしるれ　盛忠

託媒恋

さりともと思ふ文をかへしてそ婿かれにつゝひさへ入るけしきなると　為忠

よそにては生のむ甲斐ある君かはある坂山へいやさらへせよ　忠成

鶯はさへはるの鮮をなかめてや行とけかくれ雪ま川の水

顕廣

あかさにはみなれありてあひけんあさはまのきやてはしたに

仲正

心あをとそりとや深かし露やあらすむすよまちせはるな

為経

木海のかはりとのかしかさなみははほとあれ人のうけにさめや

為盛

いはしかむしあひとろかひありてみれのかはらの安を嫌き

盛右

詞和不會恋

あとよさ花はきてしなくよひとにしられぬ身をなかめかな

為忠

むかしをはむかしかへ下むとのむすほれてあれ来まは

忠成

いふせんおほねをいそくはかるぬなりゆきをそぬゆとくらん

顕廣

とのを風よせくるかたれのあしまははしもえ思ひしら

仲正

はかるぬ人の氣色にもかれてさりとくとのをいひなる哉

為業

為盛

はかなしはたのみてもなき人ことをかまへて物をなけけれはなけかれて
盛忠

あひみねと今遠えんか世にもあらはなかなかみにはたのみかたしな

卜恋

ぬさとりてみゆふうらには和田津海の浪のますにゆくと思ふとく
為忠

恵風よなひきぬるやかはるらんたのまむとしきやまのまつかせ
忠成

いかなれは言の葉のみてあひみん人とうらなへとたのみかたかれ
邦広

仲正

おもひきや恋しき人をえとのみてとふゆふかたのおもひやらるゝ
為業

あか筆をとるもいしうらへゆふかつけはかきとしひとえなきかな（ゆうまね）
為盛

うらなへ人のいのちを今はたのみにて神免るとふすきたのまて
盛忠

さりともとたのむことはよひつ思ひはあはれなるにあらしなと
為忠

忘偽恋

いつはりは契る事よつ物ていはれぬまとしかみぬ人と思へは
忠成

ちり積み君か手なれしよそもろくこゝろもすてきはうらみんはてハ

顕廣

よしさらは緒さへたえてくるしいつまりにてなかめやらむや

仲正

ゆきかはりわすらるゝ身のかれなくをとゝろしてあらぬこ涙

為業

さのむとはなけのことはゝいひかさしおふくさきの思ひハされおもへ

為盛

まの先つおなね袖少くよも川草やたまのあまに袖のかたしき

盛忠

今更なにゝいはむ哉に行さのかた髪をしはしむすめよ

經久戀

恋ひとりのそのちらくみよなのかをなくはつてられよ悲しき

為忠

おひらんとまの絵末をねかえてよ命をかけて年をへよ哉

忠成

年ふれとたのめしとよりゝ人よに命をかけてきのふけふ

顕廣

忍ふはつみちらせてきかあさきわかおもひのてかハ流り

仲正

きかしあれはいのりそめつゝ過ぬるところたのみ絡まれの身ならず

為業

為盛

まきまのとこのつの鏡山そなるへしともとそれとひか

盛右

たのこはしふる年へいそかむありそこの世なるすくさすくる

後朝隠恋

為忠

恋しくてよるはあかつきのあさつまに君とおもひさとしてはまとろ

右成

いつかと今朝は道をそ待へなよ切ぬともぬなけき見しや

顕広

あかつきにおきけるよりもなる袖を切ぬともぬこ袖の露

仲正

道ゆくと人の見をはなりてやけさしと人のかくれなのまろ

為業

あひそめて手にんやかくるんを問はありをそととしまね

為盛

あひそめて人わしかれ色をあれもいつしかけさは契とやなり

盛忠

今朝こそやいはしかいふありしとやまことつれとやけさは君そふ

若悪恋

為忠

都まて思つむかりを袖をとまる人からそかなとそなき

忠成

賤の女か花つミすさむ菫さく見かてまよふやともしなきを

顕廣

思ふとも秋ハ色なるへ出るましゝすかぬ身をいひ知るまた

仲正

たまきる袖ハ涙にあまるとてかゝよ君か恋てはせん

為業

いかにあかぬ人まつ恨ミまし我と人めを忍ま恨はせ

為盛

終夜ことにおもひあまる恋まさりて中ゝ袖そぬれまさる

盛忠

とはる昔に忘れし人目を忍ひきそくいくる日数の忍ひなからん

雑

谷風

谷川のくゝ梅か色よりの露れ谷を吹出る春の嵐かな

為忠

流れきて淀ますくなる今（なり かへりみしく（四本ニヨリテ補入ス））谷風さそふを招いたる

忠成

山人の柴刈る谷の戸たちあるくと多く風の音かな

顕廣

数ゆとも知へみやりそ久しくは木のもみちす谷の下風

仲正

為業

宮木こる人の音も絶て秋の夕に吹嵐そこさひしかりける

為盛

柴とりて帰る月夜もさむからん賤の男の袖にふかしの秋風

盛忠

ちり敷紅葉の色ひとつに見へ人も通はす岩よりおつるおしとそれは

峯雲

花の散あとまてはれぬ嵐の山はなほまさるらん雲とみえてけるかな

為忠

岩ねふみ峯にたつ雲はさなから苔の下かとそおもひけるかな

忠成

那廣

あさくれの初瀬の山は白雲のたえまにみえて名こそありけれ

仲正

嵐たつ花やさけると見てつる夜に立白雲は去年の月かな

為業

朝またき初瀬の峯の雲たちぬれは思はぬ山と名こそ知るらめ

為盛

旅ねする山ちのはなのさかりには白雲のたなひき渡る海川ても障りの空

盛方

老水

立雲のかゝれは苔むしろあらましの峯と名のみ成けり

為忠

春きては鳴瀬川をせきとせく花に小鳥のあけてこそなれ
為成

岩こえて岸の内まし水まさりて流るゝ月のかけ静
顕廣

谷菊はあれたる庭に移されぬれわかれくと流るゝ哉
仲正

古寺とゆきかひ行すゑは心ある世の人やすまゐせし
為業

君代の名の程を見つけて長宋にそある人のそみる哉
為盛

かれ流れ有のさゝみ雨そふり岩間もあらの苔をさへ流れ
盛忠

昔より長宋く流るあさか川今行末も絶せさらん
為忠

鴻巌

海人の住小嶋かさきのとまれ居なれ人もとかよ沖津波哉
為成

松嶋や雄川は末浪をそゝたてる岩のみ苔と年ぞつもれる
顕廣

春は郷にもいゝ奈とし成るいそかまゝ小村に世渡人かいとひこしよ
仲正

沖は嶋行人かなくなれ岩にゆくと名の立難出るに

千鳥鳴く海の磯ねの夜ふかくいく声浪のうけてやさむらん

爲業

おころへはのきなんせよそしまちとをかりのなと毎

爲盛

末清の岩間に生数めのりを浪はかけとゝまれなかり

盛忠

河霧

沖のみゆる宋に河霧そあさふね生ひこひ振はむれゆく

爲忠

あさりしてしほ路に河霧のむまきかなと風よ立ちなみ浪たちこえぬ

忠成

雲かゝる心ははあくれくさきたにます霧のまかしこ

頼廣

年ふりておちすに緑なる芦河霧の葉をさくらは奥の居

仲正

浪かゝる河洲浦の松の陰毎にあさきたつなる河霧のむら

爲兼

遠くなるよそひかけよるなる河霧のかつき経と浪やこえん

爲盛

かのみゆるほとりにはるのうすきにむまきなる河霧の空さらくと

盛右

楮擣

爲忠

こゑ山よ木のまよりもむこゑて猿梢木はなふ秋く空あり

忠成

梢みてわひしらにこそ猿叫はその聲のまさるなりけり

頼廣

あらしそて嵐にたえぬ木のもと猿梢とはなふ猿のこゑとする

仲正

梢葉や梢よきそはさるなきのたえぬ山谷やよをみそらし

爲業

鳴声の梢よのまときこゑもれていやたかとりといふそをはける

爲盛

むさゝのはましら鳴之声くよるやまかみよそれの人の梢よ

盛忠

岩のこすみよゐしら鳴木ゝの梢よみそはなれして

（ねころよし）

社頭

久かたのあめしれ社年毎てきこしめすよりとの宮ゐなる

爲忠

住吉の松の葉えてよいく千代か浪のをとゆくけくきかん

忠成

頼廣

浦風に神さびよりの住吉の松の葉まよりんゆかかさえ

仲正

明神ハ前こゝ社月よみんとぬ雲ゐかれやわきてゆるら拝

為業

神のますこの御社に宿れハゆふしてかくと見ゆる榊葉

為盛

ちかひの心そてらさといはれてよよるかすにみさゆらん

盛忠

さしかゝる夕日のかけにてらされて光添そふるあけのたま垣

山寺（鐘声）

為忠

あしひきの　山寺になる　きこひとに　仏為ね　打そ鐘

花のさかりハ　たちそひく　散ともおもきて　まつ鐘よ　山郭公

かへりては　雲間の鐘を　待つらく　人そゆかす　ゆふかねよ

まさ花の　みけといそね　緑なりて　見るるせハ　梢をみちて

こゝろしに　鐘の響を　きゝひける　聞ほとて　ゆくら也

こゝの御前に　あうきなく　花ひとの　かはゆかり

忠成

聲毎に聞きそて見れは池水の蓮にむすふ花のことも哉

顕廣

鐘の音に道ひかれてそ山寺の苔の庭をもふむそうれしき

仲正

明暮の鐘よりほかにそのはかるおとろこのハ山も嵐のみ也

為業

まなくや寂しの里の庵にすむ苔のみむしろすまゐこそすれ

為盛

こゝまにに清き山の岩ほ川せはこゝろをすます水のこゑかな

盛忠

いとゝしくあはれならぬを山寺に入逢の鐘の音きこゆなる

頼政

小止せぬ雨はふれとも室ちかき梯をさして家路はまよはぬ

為忠

和琴

あつまひの辨の調べときこゆるはしらぬうちにあつまなりけれ

忠成

よの海と安八嶋をかけてあつまのさとはいかくあるらん

親廣

面白きあつまのことをひく川小松をかき子身にそ志らる

仲正

逢坂の関あなたはみあらねとあつまへとあつまをきゝなれ

為業

あふ坂のせきをこえてやかてへてや東のさかへにあかる森

為盛

たとへぬきむ東のたにそのみをあすまのいまもあかしとそみ

盛忠

ちつへてはまさきのかつらあまのみる一条とゝまれる

高麗笛

夜とゝにあひはえてあやきりをしかわくと吹すさふるかな
為忠

打つれハいまの御代にこま笛をしけくも吹はやさなん
忠成

浪をわけいさかる風のたよりあらこまのちへとこそ花はえさなん
頼廣

そりあふるみきりのかたにこまふえならあわれるかいつゝと
仲正

常なりしいへ部の君の名ふる御上のことのきこえなる
為業

安部の身にそへけるこきおすこまにたてハ久方の御ちく
為盛

梅花かほにあつまあそひの笛成高やしるゝ舞するをとらかなん
盛忠

野酌

野人は出くめるもちのさかつきに梅の花のうけそかる
為忠

さかつきにうけとらくてさゝれあふしをの人に出よまるかな
忠成

とる盃はいさゝかならん山路のそのうへにたゝくる菊のその露
顕廣

仲正

あさしや河のくたちさゝなみて旅ゆく人をあやふくとやみん

為兼

旅吹舟人ハ喜海わたしきト吹上風の酔をさます哉

為盛

みなとよりいつる小舟に渡船してさしこそかへせたまはさりき

盛忠

風そよく秋の舟立て鈴なくもときそはゆくせ葉に袖の露

温泉

まく人もとくいそ湯あまのありまの人の名をとけぬさし（ミえ）霧は猶ゆた

為忠

ありまやま岩まをわけて出る湯にハ清く人の足そたえぬる哉

忠成

さゝかは湯の有馬の湯ハ我なれや身をうき世のこたひ人絶

親廣

救なる身のいやさハ有馬なれはこそや出湯のしるしあらしな

仲正

分ていさゝまの水に出そめていくよになりぬ旅人そなれ

為業

思ふ事なるかさとに出る湯のきしをなかるゝまてとこそきけ

為盛

盛忠

かくらに出湯はなくさてし雲かくれよそにかゝる峯の花

釣船

遠くやはいそらの濱の浪まよりいはほの海士の舟よすらんな
為忠

阿波の鳴門のかこみより川つまて舟これかすか海士の釣舟
忠成

帰るさは煙や宿のしるへならむ沖中のあまの釣船
顕廣

すみよしの海士の友舟さそひ出よあさけの風に浪もたちけり
仲正

為業

風吹鳴海の沖に釣舟の浪にたゆたふ蜑のあみかの
為盛

よさの海ち（そイ）まとのあらに漕かくる浪にたゆたふあまの釣舟
盛忠

雲拂ふ秋の夜風に月さえて明石の浦にあまそ釣する
為忠

王昭君

心からあらぬ雲井にきてみれは月そうとくそかなしかりける
忠成

唐衣うきなかりしみやこのゝ梅は恋しきよのさとそくるき
顕廣

ゆたけくは月のかつらの姿のいろやかしよの人にあらなん鏡
仲正

昔きくや雲路に家を書かへて花の姿をけかしける人そは
為業

花ひきや花のかほをそかくれ出てかれあらぬ頃をそのはは
為盛

ゑやしくそかゝる人の親きたのもしはかるめこそ○を画きさすらむ
盛忠

なけくまに鏡のかけもかはるらむ絵にかけりしかほの成らん
為忠

上陽人

いたはしなむそちのまてそさすかに鶯のこゑひすしきはつく
忠成

老まさる身をそ恨むる鶯の百囀をきゝつくる哉
親廣

春の日と秋の夜のまとおくるまにいつのまにかは年のむそちそ
仲正

むかしみし雲の鬢かく雪かりてうきに老ぬることそかなしき
為業

なかくなる秋の夜すからあけくれはむなしき床になきわふれは
為盛

暮ことにさひしき文の鶯をきゝつきてつらしそ今日もくらしつ

さぬきにも宿見えはさらにさすな浦とうみの舟のことをたのむ

盛忠

楊貴妃

まぼろしの使にやとそ多かりしちきりし事は蓬か杣て

為忠

秋夕にあれは涙そこほれ出るかなよなよとふりしすかたを秋の夜

忠成

七夕は今とかたらすあかぬ恨をその夜結ひしことはいかにそ

親廣

まぼろしの玉のかさしみしる人そいつも仙のすみかなりけれ

仲正

為業

ゆりかけの枕のちりをとりてこそ松虫の野辺の夕されぬめる

為盛

ときはなる松たちまちしとのかさをあきのゆみれはたゆくにまて

盛方

人はくにおとのえいそきまのまし松たちまちをむかひとうすは

浦嶋子

まきれ海に釣する海士のありかにて鶴のころもとそおもふ

為忠

思ひきやかさらんのそこをあけさてはやてひあけくもをみましや

忠成

顕廣
故郷のよふかきとかへりし床は恋しさめてこそあはれなりけれ
仲正
ゐもしくと浦路のみなとこそあけて行はまに海てひく人そみゆれ
為業
都へまてみけるましいかに恋しく人のちきりをまつ人もなし
為盛
むかしなからと帰りてこそまつん身につむしのかはあまけきを
盛忠
古へと恋しと思ひし事よりもかへりてのちはいくたありき

遊女

為忠
独寝はこよひとあけの泊そゝとたのまはこれはこゑな恨みん
忠成
明暮はゆきかふ舟に川ちひて浪のうへにそすまゐなりけれ
顕廣
ゆきたちて宿とさためぬあまのこはふなそくこはや住よかるらん
仲正
川の瀬に浪のうへに草まくらかれあやしくその名しれ女といひてなのまん
為業
それそと書さためぬ河まれにはゆきてのみをそ頼まれにける
為盛

浪のよするなきさのとまの海士のこやハせはまりて宿ねそらん
　　　　　盛忠
やとのをやこに舟をはなれは往来の人をまたぬ日そなき
　　　　　為忠
眺望
まとふかれたるこそなかれ松かえに雲かゝりわたるあまのつりふね
　　　　　忠成
見渡せは難波の浦をとをくミて芦のたえまに鶴たつなり
　　　　　顕廣
いさりするたよくていさらん船もなく霞こめたるきよみの浦
　　　　　仲正
和田の原入日隠くるゝかたそさやかにハあけかたのそら
　　　　　為業
見わたせはあこの浦風吹ゆくに伊勢の濱荻なひくなるかは
　　　　　為盛
なかめやと見をはうらまの濱へよる浪たちまよふ人のしほみち
　　　　　盛忠
月影の浪よりいつるみゆかには いかなる空か八雲井なるらん
　　　　　孝賀
嬉しさの身にあまりぬるなかされての舞ゑのあまん人ゑます
　　　　　為忠
　　　　　忠成

よそなりし雲井の花になれてこそ春はあはれちる

邦廣

（コノ歌ハ他本ニハ細字ニテ書入）

君か代ハさゝれ石そ九弥代をかさねの年を経るまて

仲正

あつまひとひとよすからまち恋ん人をかこちそわかれまし

為業

葉山人世にきこえし人よ雲の位の山のこへしは

為盛

あらし嬉しき事のかすかすはちひろの底のきはなりて

盛忠

まとひなれしその秋の月の光みてくもゐの山との月ゆる

頼政

いにし人は身にあまりけるけさの今はみとはなさとそる臣

丹後守家百首　後度

讀人

木工權頭為忠

勘解由次官親隆

加賀守顯廣

兵庫頭仲正

伊豆守為業

散位為盛

備後守為經

散位源頼政

丹後守家百首

題

桜二十首

山中桜
旅泊桜
磯邊桜
浦路桜
池岸桜
砌頭桜
隣家桜

嶺上桜
野径桜
嶋上桜
瀧上桜
園中桜
檐下桜
山寺桜

洞底桜
関路桜
邑邊桜
林中桜
庭上桜
遠村桜

郭公十五首

首夏郭公
深夜郭公
夕郭公
羇旅郭公
船中郭公

月二十首

三日月
十六夜月
立待月
廿日月
有明月
朧月
閨中月

雪十五首

神社雪
竹園雪
帷屋雪
葦間雪
簾中雪

戀十五首

未通詞恋
絶見恋

人傳郭公
曉郭公
雨中郭公
山家郭公
馬上郭公
晩月
亭午月
居待月
木間月
山葉月
雨後月
霜夜月
故郷雪
杜間雪
杣山雪
墻根雪
氷上雪
見手跡恋
時々見恋

寢覺郭公
朝郭公
閑中郭公
夜々郭公
晩夏郭公
弦月
伊佐与比月
寢待月
露上月
雲間月
水上月
行路雪
海辺雪
苅田雪
風前雪
車中雪
聞音恋
隠在所恋

来不會恋　逢日増恋　憑人妻恋
絶後恋　寄井恋　寄鷹恋
寄鏡恋　寄錦恋　寄糸恋

雑十五首

卯杖　蹴鞠　闘鶏
神祭　賀茂祭　騎射
乞巧奠　相撲節　小鷹狩
射場始　五節　臨時祭
庚申　競馬　圍碁

桜二十首

山中桜

木工頭為忠
消残る深山かくれの雪かとそまれなる花と見て過ぬらん

勘解由次官親隆
桜さきの宿山越まもりけるは花まてなりかおのこゝろゆく

加賀守顕廣
出羽くにしと山の花と咲すなり峰の白雲ひとゝわきみはるかすまて

兵庫頭仲正
吉野山さくらのまへと見て隠るかはなけよ花のさかりなりけり

伊豆守為業

春ことに見て尋きてみれは桜にわけ入る山路のしるへなりけり
散位為盛

行人に太山のたつきしらせてし桜の花か咲なりけり
備後守為経

山姫のまとゐかひ金手のほし物花桜月はいさりなは
散位源頼政

花見人は日をやかさねむ末とをき花のかきりそ花の山路を

嶺上桜

咲にけりうすくれなゐの花桜色をまかへし峯の横雲
為忠

親隆
芳野山花咲ぬれは雲かゝりてよその人はたえてこそしれ
顕廣

夕はへ日いるさの山のみね桜うすくれなゐに萌そめてゆく
仲正

かみ山の嶺のうへなる花をみてあかぬ人はあしそたつ
為業

山高み尾上の花とおよふ身はかけしかけみえつしと思ふや
為盛

よそに見は嶺の白雲むさきゆかの峯の花のみとなりけり
為経

しら雲や峯の桜となりゆかんかゝるひかりを色のかすみね

こつみし嵐は桜にさそはれていくさの桜と知れけるかな
頼政

洞庭桜

おれ出る川そへあるとしられなる人とかよはぬ舟のさすかは
為忠

舟ぬるみ花のあたりはきさはしられぬ梢ひとりみしなり
親隆

桜さくれは千ゝに世の舟の世わかる桜いくたひきさにやたる舞
顕廣

高根より舟の桜とみえてさくは楫のなかそ青見え舟の数
仲正

秋へやいそやこきさん舟は己か住家の花をたつねまつとく
為業

まとゐせんすみれの夜かけてまさて山ふところの梅さきそれさく
為盛

いそ見し舟に雲まのこそは梢のうみ花を志らほに舟の追風
為経

舟人は岸をもさかりいそくめりこれ日へちらん花そとみえん
頼政

旅泊桜

ゆふなとみゆる舟の梅ほかれ花やまくとは泊つなかさる浪
為忠

親隆

ふるさとをおもひやりつゝゆかてにもならの里はさくらのかゝるましつね

顕廣

桜花さかりをみんと思ひしに世の中をおもふ人はたゝひのうき世なり

仲正

桜咲ゆかの山のをもかけはまさを見えぬとまりありけり

為業

高馬山井かなれをかとに手をせくものにまかす花をこそ

為盛

かりそめに舟川のはやくみえてそ吉のゝ桜をさくりをすさは

為経

あれてせのりやわかまんとする袖の尾上の花をとめるこゝろは

頼政

うちわたる日数は経とも桜花匂ふあたりはこえかてにすと

野径桜

為忠

春日野のまたやちりなん八重桜たつる若菜の花そ見えぬ

親隆

みよしのゝ山人の霧のたえ間よりはるかにみゆる桜かな

顕廣

春駒のあゆみに入ぬみてはかるゝ山人の桜かりかと

仲正

梢にこそ思よりけれ花ハ散ぬれはその名残れるあとはなに
為業
花鳥もまつしるまこと春のゝまたては桜にてしるそ見えける
為盛
旅人よ駒なつ見えてさくにつけあてのへの桜ちるまれ
為継
きゝす鳴かりのゝ花を見るとてや桜狩とはいひそめけん
兼致
あるゝやくらまの小野の花桜そのみかけてすきむ物かは
為忠

関路桜

ひとゝせハちる関吹風のとかりの関守すゑは
親隆
桜花せきかふれの関かは花そてかよふとそ見えさらへき
顕廣
月影のさやえ花秋にあり猶さゝえてそれ春しら川の花
仲正
見渡須よ越しまりいそてたゝ花よ吹せよ如ての関守
為康
花とてそとめけれのみハまた小君かるの関に行とも見えは
為盛
さゝねさと人の心をとむ花の春は世はとめみる永に吹せよ

為経

白川の関をハ春はとゝしかし花にさ宿め人しなかれは

雅政

ちる間はまた花そふのせなかり　花をこそ見人よまぬの世なる

旅過桜

為忠

散花の雪と旅まはやいそふつむあまわたるこそ袖さゆらん

親隆

桜ちるいそ人よあそろ行まへは花をうらはくとて捨旅たり

顕廣

風の音といそのけりかもとよる浪とあきさ旅やにいる桜て

仲正

飛のこすし出れいそふちりか数花をみしらうひるせそ吹

為業

蒲むや旅の人ちるむ雪ふみの苔れよるをみらかれ旅の霧

為盛

桜川風ふけも心川る花り　花の香ちえよ浪よ杉るあ

為経

風吹も渡いその桜花ちりてそかへるし浦なくさよ

雅政

吹風のある旅桜ちる時はへすみれあるのたみそてたちける

湖上桜

為忠

吹風かうとその桜浦にちらせむ花て浪のよれこそちりけり

親隆

松しまやをしまの桜咲にけりしてわれ沖つし浪

顕廣

あまた猶桜とよしやとりせん浦路のこゝ悪しかみなま

仲正

春風にさそはれ桜花かよそて浪のたちさへてあて散ゆら

為業

あけそとく芦かりを子漕出てとくしまの花さくらみむ

為盛

ちりぬともみし海の桜かはなはあてまよりのちのかさ見えさん

為経

桜花ちるらんかぎりとらむえまのさかは暮のよそもかへ

頼政

雨ふりむら中海の花桜いそなりにけさそ鮮

為忠

墓辺桜

桜咲けしれ墨よさく時いとをもかれの出くさそせたる

親隆

あはれのいかにこもりてくれなゐの煙とけふの墨ともみれ

顕廣

山風をいとひしの宿にゝほひあらはいつかたの花をよそに吹そよ
仲正

こゝろなきわか袖の上にちりかゝる花はなをますかたゝれは春嵐
為兼

いつくやちらんとすらむ春風はいとひしの宿に咲にほひては
為盛

梅花思ひの宿に咲ならは風日さきそありとまつらむ
為經

花さそふ夜嵐宿とまてこれそ袖のとそなりつ春のあけかた
頼政

まつ山まつ人まちかねは眺る宿のとかみよそなる花梅かな

浦路梅

浪こゆる霞の浦に交るとも梅かゝいとやしるはかりにて
為忠

みさこ井の磯さきの浦に風ふけは梅かゝひかる春のあけかた
親隆

塩やきのむしろの梅に吹風をうみてのとことゝまる春の夜
顕広

浪かゝる浜辺へちりはおなしく花のうへをとひてふな人そしらぬ山かな
仲正

見る度にとまれるなれは浦の梅をもちる度ことにかくてをとゝめはなん
為業

まぢくそに衣の浦をまてみれハみなとの櫻かころひより
為盛

舟とまる數志賀の浦なミ吉川かなれみなみに咲るさくらのゝけせん
為信

さなミよる浦波と見てぬとそ花のおろす嵐の山風
雅政

瀧上櫻

水上のそはの雲井に見まかへるちりくる花やおちたきつせき
有忠

水上にも咲かよふ布引の瀧の白いとかさますらし
親隆

咲かゝる峯の櫻よりおちくる川そよはや瀧の白いと
邦廣

雲かとらなる峯のよ風吹は花ゆきとなす瀧の白いと
仲正

そのかみと瀧の心の見えけるハその水上に咲てかゝれり
為業

水上の櫻さかりハ白雲のかゝりて落る瀧とこそ見れ
有盛

布引の瀧のあたりにちる花を流しはしとや人の見るらん
有経

雅政

あさにちる花ぬきとよ落て来る滝ハゆきけの水かとそみる

林中桜

為忠

桜花林のこけえす滝ろ人とあさかくとせはまよふなり

親隆

さくら守すあくぬこけさとかれなくしほれきも見え花桜かな

顕廣

作りやくねき御かきのおくにあはせけれ花のあるかな

仲正

桜咲し林のかくれ里とみゆ来てはむかひなかりよさまるト

為業

かけけれは鶴の林よりむれてこそ花をもかなしむ心さそふらめ

為盛

あたしくみれともあかぬ松原をことりの中ぬ見えさそふらん

為経

花ハあると花の梢と見ゆるまてまとはれゆくのちりしまん人ハ

頼政

春色く吉川猶やことし咲まさは花と花そのこ年しかり

池岸桜

為忠

吹風はみきハの桜ちる時そ池のうき草それ咲にけり

親隆

まつ池岸の桜に風吹て春ハなミのうへに咲けり
顕廣

いはまもるみきはに匂ふ桜さく水は錦やうかへるらん
仲正

たまよりみれは岸への桜花錦をひとのあらふともみえけれ
為業

かゝる池のみきハハ吹わたる浦風に桜をかさす春の晴かれ
為盛

桜さく岸のかゝみにあらはれて底かき池にうつるなれ
為経

岸の花ちりかう波にさしかゝし池ては浪のきはとそみゆる

散ものゝかけにみえける池水は庭の風のうつかとそみる
頼政

園中桜

見るよしてなるとそのにいろあかてあさに桜のさかりをそみる
為忠

山賤のたけのさかなくのそのゝうちにあらしをたてゝさける桜ら
親隆

こゝろなき残りの苑の花桜心のたかもなくさきえたる哉
顕廣

みそのふに春くれぬ桜散かゝる垣根に卯の花そ咲
仲正

為業

わかそのゝちりし跡にゆふくれてちかすむ風にそはらしかなれ

為盛

ゆみかすそのゝ桜花ちれハまこそりて見ゆる庭の上

為経

余所ならはちりことたかき桜ちるはかりの小ゆふくるゝ哉

輔政

かこへとも垣きの内こす春風にそのちりてとえしれかるらむ

庭上桜

為右

ちらしてはゆきくと花を庭にとそゆるさてきよきいつは迄

親隆

さらてあされわかとゝそ見ん程も残のやとせとの庭の花のちりかた

雅廣

庭とめてこの下陰も苔にちりつむ花をとまるハちりまれ

仲正

かくゝやこまともかさぬ家宿の庭をせんさくらすさくらん

為業

宿に咲花に今日の梢かは庭にまちてにかくハちりし花

為盛

桜花あらしの風に誘はれてなへての陰みとりにちりしきるなり

為経

桜咲都のあ免人の浅くひきそかゝる志川くれぬる川のかはよと

頼政

春之をはちりてひさしくなりにけりはなにみきりぬ桜とそきく

橋下桜

為忠

まちかへよるこすんなるよの橋のうへをわたるあひきのまゆと桜は

親隆

岩橋のむかしの光をちらさんとてあけのよるよりかつら紀の非

顕広

岩橋をほしてよそにかゝるらきやよしのゝ花の桜く

仲正

えしより桜をさかぬまそ桜春のくれはや橋のあの渡

為業

いそのかみふるの原の桜たちかへしわれは為つらしきの

為盛

みな海にうつとれなる花のちるこのはしみにくみそてし

為経

白浪のかとそよわきしと見て渡る八橋のちるさくら哉

頼政

あたなる花のよそにみる山川のかはらをわたる海とそ見ゆる哉

遠村桜

為忠

雅の後苑の桜そおかのうち霞のうちより見ゆる白雲
親隆

春はさとかすみまさす白布と見ゆるハ花の梢なりけり
顕廣

遠く見ゆ一村ミゆる白雲は花さくさとの梢なるらん
仲正

春くともまたなきちるたてゝ見る雪の梢の色に出ハ
為業

白雲の峯にかゝると見ゆる山のはは咲や花のさかりはよそめなりけり
為盛

春ふかみ雲まに見ゆる桜花やまさとの木の本なるらん
為経

見渡せは霞のさとに住なれて雅なるのとをそれと見る覧
頼政

あさ海とさき舟人の霞の絶間より見ゆる木末や桜なるらん

隣家桜

我やとゝめかりしきられをそ桜いとよそ明の匂ひとそ八
為忠

余所ならて春ハ人目もまみえけりならひの宿のそれのさかりハ
親隆

花のちるやとのあるしにほむ時を吹くる風をさそといとふ哉
顕廣

仲正
花をまちし人ハおもひもそてにはてゝ人かなしみかねし花

為業
鈴夕まゆれてみんよしや桜花ちりなはのちのなかめなりせハ

為盛
かきこしに梅れ来る風をいとふや我身ハ花のあるしなるらむ

為経
飛かうにまかせまし風の梅花ちりてよそなる梢や花の梅の里

頼政
桜咲道しもひとつかひかなしてみえ吉川之まそこん

山寺桜

為忠
咲匂ぬらしまれ山のかけ桜まつのとも匂ふなりけり

親隆
花をこそたのむそらともきぬ山の人おも経をきこしめさる

顕広
梅とてゝ年ふる寺のこけのうへに嵐れ桜のたねかとひよう

仲正
山踏の小寺にさける大桜花のねとはわか見ぬ師

為業
まして雲たなひく山を川ならぬ花の梢をそ見る

為盛

よそめみて花とさくらにみえし人や雲ゐか寺とおとはつけむ

為経

昔ゆかし人あり井のみつの藪花をしたまくとおもへはや

教政

山寺はあか井の水にちる花やのちの世まてと清くなるらむ

時鳥十五首

首夏郭公

時鳥ゆきの里かれぬ思ひねをききてはあはれの袖や人にしられぬ

為忠

夏衣たちゐにつけてほとときすは山かよひきすひとく人あれまし

親隆

顕広

鶯のこゑつくしはし時鳥こゑやゆきのひとりなからん

仲正

夏衣きつのいちとや鶯よ山時鳥まちをみる哉

為業

きゝみけてもやまくら出し郭公けさそいかにも神さひく

為盛

いかにしかまちかけるかよ夏衣たちかさねつゝ待ときはしす

為経

かのゝさしなからそいろみのかきりはやいかにしくきなく山郭公なけ

彰政

いはのまに花ちりぬれは郭公まつにのこれるなるらん

人伝郭公

為忠

まつ事はわひしき物を郭公わきていかなる山になくらん

親隆

人ハ皆きゝてかたる物を郭公をのれにまたにしらぬ身そうき

顕広

としやそのゆかりをとりて時鳥なれけりやさは今はみける鶯

仲正

きゝてはいかてなりみきん時鳥そのゝうきなのつれなしと（ひめてきさ）

為業

人伝てはよそにきゝし郭公声あらはきかまほしくは

為盛

ことゝふを誰ときゝてそ時鳥かとたれけりとおもひけん

為経

郭公声ある鐘とまつ川てそかへるかたにこゑのひゝく覧

寤寐時鳥

為忠

あまたゝひきゝしもねやに時鳥声をゆめともひけやなからん

親隆

ゆめさましてきくとやいはむ時鳥ねさめの床は夜半の一声

顕広

まとゐせはやかて見えけりおもひのまの葛城なくほとゝきすを

仲正

よもすからまちまたれぬる時鳥きてあかしけむ杉ひの初音を

為業

初音してきてとやきかし郭公まつ夜を露とわれしらなむ

為盛

寝覚てしのひつゝみのさよ中に身にしむ物はふかきこゑかな

為経

まちねなき夜やまちてこそ時鳥なく声は初音なりせは

頼政

一声は寝床におとろかれさむるめにまたあひそれほとゝきすは

深夜郭公

さ月やよはや旅の枕そてて声をとはしきほとゝきすかな

為忠

寝ぬ夜のふけゆくの浦に郭公なきつる川浪の立かへるなり

親隆

郭公あまよにさのりて色まさる枕ひつきさよ月そはれ初音

顕広

まちわひてくるゝ夜半しま夜にかく更けぬ山ほとゝきす葛こまて見え

仲正

きのひ初の夜半清しみそ時鳥されさと人にきゝつるかな

為業

為盛

待ちかねてまつらむ程に時鳥きゝはをとゑますれとつゝす

為経

宵程に程なきかひを恨みてもさまたれつゝかときゝつる

頼政

暁郭公

為忠

あるかしの影をともなふ山のはを東より出る月ときゝ鳴

親隆

時鳥なかねはいまそきゝしをまたれぬなきのそらとすへなり

顕廣

思ひつまねきけるに時鳥名残おほくとあけぬるかな

仲正

暁に声のゝことゝかすれと山のはとほき沢てこゑとせん

為業

郭公まつとしられて出ぬなり八声の鳥は忍ひやはする

為盛

時鳥なくねとしられ宵はし山寺の鐘のひゝきにまきれぬる

為経

葛城のみねのかくれに時鳥あけぬる空はいつちゆくらむ

頼政

さ堤しられぬ人といゝるさの山きはよりあかつきてほとゝきすは

朝郭公

消やらぬ夜半さての嵐の霧分て聲あまたなるよふかくわたゝきす　為忠

時鳥なはたゝすらに紀かとの杉梢のすゑにきこえてなけ　親隆

まちあかし寝屋を出て郭公はいつるさとよりあさ井さすらん　顕廣

郭公鳴聲はいつくかけと見んかさとより山のあま霧色して　仲正

為業

あさの山まもなく晴て屋時鳥木の下かけにきゝつなくらん　為盛

郭公いくあの里に待りしてあくれはこゝに急きなくらん　為經

嵐はきあさける雲まにはれてさやまたち出る時鳥哉　頼政

かさゝきの宇橋の朝霧にわたるらしいまそなくなる

夕郭公

もろ皆待てよかるゝさ紀ゆふくれをとりやせん郭公かな　為忠

親隆

ねくらもとむる山の夕やみにたちとまりてきく時鳥かな
顕広

ほとゝきす毎よ夕暮みせん時鳥あらしかゝる森の木のした
仲正

わたりするそのとりゝれてきゝつるよさらみ川ゝ篠の原
為業

此里の花橘に移りしてむかしわすれぬかをりきくらむ
為盛

忍ふ日と入道の経の声に山ほとゝきす拝あまたす
為経

時鳥夕すゝみせる
まちありてきゝつらんかな

郭公入相の鐘に打合せて忍ねくと鳴わたるかな
頼政

雨中郭公

五月雨にたちとまりてや郭公をちかへりきゝて鳴わたるなる
為忠

夕暮の新の雲に忍せよ山かくれにしかすみやすく
親隆

時鳥かくらく露しおもいはやきゝし新のなく哉
顕広

郭公ねのうらかけよあかつきそ忍まれしてなく声きけは
仲正

鳴くら雑しそはつね時鳥あすもやきかん雨晴し今よ
為業

この里にあすもやとりせよ時鳥声のよるまてそいちらん
為盛

ゆふ為よ夜ことりなく郭公すかの山を鳴ぬなり
為経

雨雲はれて聖よあれ中には時鳥夜半しそそとれきこゆなれ
頼政

閑中郭公

なましにかたきけといひを時鳥あかつきよみかゆるとされは
為忠

はるかなくさみにせし時鳥それなる今はかとうまてきん
親隆

なとなくあれ行やとの梅よむらし行あり過しゆくらん
顕廣

山梅のこ宿りすむ人のわくらはに郭公とやとはゝならふ
仲正

あれとやすらへてみえし時鳥ひとりなかめの里に鳴らん
為業

まちつ人まれなる宿は時鳥打て宿こそ友としなりける
為盛

為経

きゝそめしおりはとなれこゑまし人よ余所にきゝつる郭公かな
頼政

はるかなるをちの山へや鳴なるよそにしきなく郭公かな

羇旅郭公

為忠

たひゆくみちのけしきにかけやてよそに鳴なる

郭公まつやかれにそうてまてまつらくよならん
親隆

顕広

こゝろみしあきちの原ゆく旅にてたそかれ時にほとゝきす
仲正

あさまたき駒のにしきいそれ雲ゐをきてあはせつる郭公かな
為業

鳴なるをく旅ゝ衣よ山ゝとせくまれ枕よれなく空ゆくや
為盛

郭公旅のとまりかつねとなひのそらにこそなりけし
為経

草枕旅の床とわきまれみやこにまさしよはからす
頼政

あはれなれ山のかけなる鳴なるすゑのしはらくすむよかす

山家郭公

為忠

あさにけに残の竹のはかれつゝまちかにきなくわかまとの前

親隆

郭公きさこそはけてよねせしよのかいかれきうらんとく

顕廣

初声はまちをと鳴らん郭公とやまのいかすかれともかさらん

仲正

それきゝて夜さへのをとみよ郭公このやちゝく夜あけはつらん

為業

都へといそくかれ郭公声のあさとにきゝつゝそし

為盛

郭公めつゝ夜をまはゝうれしく帰るとも中を深山へのさと

為経

明ぬる夜をさゝのみや山里に住なからこそ鳴し

頼政

郭公鳴らぬやるこれそこの山里へこしよれゝ哉と

夜々郭公

窓竹に鳴川に鳴夜明る来ハゝいれらす夜そかゝる哉

為忠

親澄
呉竹はよゝに変ハらしきこゆなり緑やの色にこそ出れ
顯廣
時鳥きこてゆる東をまち遠橋立ふてのなれ所ちりせハ
仲正
あまりまた鳴夜よしに世よ時鳥変ありなぬてふ人もあらなに
為業
きく夜庭となれるみのあられ時鳥浪打よせて変もかはりけれ
為盛
我やとのゝされにちる花よ緑や三えくよされねときこゆる時鳥
為経
人言も待しあるせはかゝきなきそてむ東の枝をそさきぬ
頼政
かく夜東をまつとまかく八郭公のきゝさへあらしきふ
船中郭公
為忠
あかけのいさてさそふ海中良へ定まるやくもちる時鳥は
親澄
いそちをせとのさやつき変をあよむあけの松よかよきれ鳴
顯廣
さ夜和ねきこえ初郭公鳴山本のほのけつる舟
仲正

まほら船くらきよそに漕そくるたえまもまつに鳴時鳥
為秉

風と浪ひより雉子て郭公なくこゑのとに出しとれむすふ
内蔵

浪間よりけふ数舟路にほとゝきす渡る夜の月に鳴こゑかは
為説

何事をいひおはしほとゝきす拜見る浦の船てなかすは
教政

葛の旅舟ならはるてほとゝきす波と渡る船のおとしやいかに
内忠

馬上郭公

時鳥なきて幾たひしも故の谷川雲井にたえゆく来ぬ
親瀋

またさゆくとされしまひのむまのよこと声ぞなくまくら時鳥なるか
顕廣

打渡る駒のとまりにほとゝきす高嶺に雲出せるの古橋
仲正

駒よふみ跡をむすひ時鳥なかりし山にわかれて
内業

鳴声は安の宮川にあゆ駒とめて雲間にほとゝきす
為蔵

行若山時鳥なくに駒よせて花見待つらん

為経

明ぬとてゆふつけてこからぬ郭公鳴なるこゑを安くわか聞

頼政

たかくは待さとにきゝけれとも頼人せは明ぬあとつれな

暁更郭公

五月雨にさはりしてや時鳥夜ふかく出て鳴らむ

為忠

夏の夜の今そ帰るし郭公まてのひしかはにはけしなりけり

親隆

五月小夜をわすれはてゝ今そ鳴山ほとゝきすや待らん

顕廣

仲正

夕月はおもひての菖をまちかねてきそのたかさは待てなく鳴

為業

郭公さつき待れは夏山にたちかへりてそ今もなく也

為盛

たゝはるこゑをのみ待し夜の明くるまては夏のさよかたふきて

為経

夜をこめて鳴郭公夏の夜ははつかにやなからん

頼政

五月てとふ八月の郭公夜のまてしいそく鳴なる

緑月二十首

三日月

為忠
おなしくと出る日影に影は一つくも何三か月の影となるらん

親隆
いかにしてほのみえそめんかは霧の山より三日の月は出ると

顕廣
秋来てはそらをみるかな三日月とおもふまゆけのさえまけるかな

仲正
影見えや影たけかゝる三か月のそらひかりもえんのよるかな

為業
夕暮の入日と出れは三日月の光夜すかへ出まちけれ

為盛
さぬまにも影なのか形の三日月は心ほそくもみえまさりけれ

為経
夕影とおもひてやらめ三か月のいる山ちかく出るらん

頼政
かきくもる空に思ふまゆのほそき三日月を心ほそくと眺めやるかな

暁月

為忠
暁ねぬあまのとまやに夕暮とあはれの影にかくらひとゝめ

親隆
あこの海の浪のよるはそらに月影の独すみて暮数夕暮の床

顕廣

まゆのあそほけりをまてこそ見る月を夕つくよかな　仲正

葦ふくのやしへこゝろしよりのけ月をいまふと人をとはれ　為業

よな人とはしるる山の木間よりいてさりぬるゆ暮まてと　為盛

よひの間にあつまれたるけひて猶さへ入ゆふつくよかな　為経

天はれてようす村雲にほのかなる夕暮くよれ　頼政

山端に入日の影のすかれてたゆかれぬるゆふつくよ哉

弦月

あまの原まかりて入ぬる弓張の暁ゆきてかりぬれ　為忠

まきるる雲やゝ入のそてまれハかさしてまそる弓はり　親隆

いつよりいまは出つる山の端に入のこりける弓はりの月　顕廣

いさよひにちかまねハ雲に入るかたまの山の弓はりの月　仲正

弓はりの月にたとへる雲はれくるかれの里に見えしまる　為業

おりかとゝたちをまちぬる夜の月ハ入佐の山のあなたにそ
為盛

さ川ゝち山のを近く見えつるハ月の光の入かたの影
為経

ねまちにはゆふつゝまてとおもひせはいつくやせましちらの月
頼政

十五夜月

つねの夜もさえぬる月のかけなれと今宵そ更てかけまさりける
為忠

きそれハ秋の半にありぬると月ハこよひそことさらまされ
親隆

月は秋あきて半にあらねとも秋のさかりそはかりなる
顕廣

めくりあふ秋のなかはを海となる月のふるさとひかりなり
仲正

月影にあひとをかれ逢坂の関ちの駒ハいまやひくらん
為業

行秋の中ハ今夜そときくからに今宵の月を誰かみさらん
為盛

穐の夜の月ハいつともあかれともまさる今宵の照まさるかな
為経

頼政

いさりひはなかれはこなた川いつくなる庵のこれからやるまてさやかなる月か

亭午月

おもけ夜やゆふさにかゝらん月の光をみやこ出なより　為忠

なとやかくしはらひて葉まれ月はむまほてんみのかけん　親隆

まちわひし秋のなかはにある月のみよりすくなるかけのさや　顕広

あくとすむ山のはとほくのけてらん影かさよするまろき月　仲正

為業

夜をとまちこかれし世かはりよに出くやはしふまの月かれ　為盛

あまの人おもひしとゆふまふてる月の影はむなすをめまさるゝ　為経

なみまそひきての白浪のおひくねはあひ月やたゆくあらん　頼政

照月は夜半なからこそあまりなる秋のこゝろかなしけさあひす

伴佗与眺月　為忠

こらて出きのふ代菅の辛きかゝるすそあらいさ夜月　親隆

いさよひの影にむかへは老の身は法の月のかたふくをみる
政廣

やとられ出もせすしてやられしもまちしも法伴作千飛月
仲正

ちかくとゝよの身をおもひてやいさよふ月を待渡る
爲業

おとなはおもひの浦へさそふとてなみにゆかむいさよひの月
爲盛

秋風の吹て浪よる雲間よりやすらひくるいさよひの月
爲經

かすみそしやとはれしよひのとかなるあかいさよひの月

立待月

みそらゆくいさよふ月をまちかねてねくいてぬるもうらみてのは
頼政

人まれを待ちたちまちは足引の山よりいつるをまつとこそ
爲忠

さよ中やかたまち渡るかけとともにさよふけまさる待るかたは
親隆

露ふかき袖にさへしれやよりたれ旅のそらの立まち月
政廣

あつまちやさやの中山きけくとてかけにまちたる立待の月
仲正

為業

秋の野の露分こんと行かひ今や出ると立やすらふ月

為盛

叢荻のかせやまのはにふけゆくはまやくと立待の月

為経

かつくは立出くされて窓たつみこえぬる月の光のかるゝ哉

頼政

雲よりのさきすむ程は久かたの月いそくれ秋は流れ

居待月

為忠

こぬ人の夜をそ露よゐまちける月まち出ての光のさやかなる

親隆

いさよひとかくゐまちの月と待出ん今はいさすゝ待えて寝まし

顕廣

山里は雲のさむしろうきねまてゐまちの月をまつとさひしき

仲正

雲かれにたちのみけや秋まとかれぬねまちの月のいそよさかる

為業

たそかれのいひ居待の月とかくせうすとくかてのわさかる

為盛

身のうさの身まて事は忘るとて月まつ程のたよひぬなり

為経

まれのよんとさしてけるこそ嬉しけれ秋のなかはの月影

頼政

山端のとをさぬ宿にまちみてそいさよひ出る月影

寝待月

為忠

あつまやのねやのあみよんと待ほとにえやうすゝくと出る月

親隆

まちかねて今宵とゆふ月をとみてねまちわひぬるならむかはり

顕広

まちかねて月まち猶よふけしましつ絶はてゝ待す山の端の月

仲正

立てゝと思ふなこまちぬうさによりて寝待の月をしれこれ

為業

秋の夜の身へうちへぬるいはひくもり廿日余待月をとみるかな

為盛

うきまれ秋よねまちする月影よりそまけるとそ待られけり

為経

さよねまくらにかしをくれ廿日余の月をまたこえて山のはのをと

頼政

ふけゆきてねやの里みまかんかなよさにをしめなる山のはの月

廿日月

為忠

さゝ人雲まよふ川ゝにうつる月影の出るをそかさみなせ那影
親隆

住吉の岸の神さひ山乃端よふ川ゝの月を待て忍さしき
顯廣

さらしなや更けれ雲まの月影ハと霄の神さひふ川ゝ舟渡る
仲正

こゝえなむと結ふら人をこゝそそや山のはつゝよかけぬさえ立
為業

月影よ見しにさらあふさきみちかへ中たちよゝりとものこて
為盛

さしのほるつゝの月ハさえみてまひ行人をといわりさし
為経

猶とおく明なん物とあるくにくまなき川ゝの月も出やらぬは
頼政

よひのまにさはりし事をおもふかなのこる月のあさみの月かまて

不問月

小車文をまちよりの多くハ月のふこし枝のかけかと
為忠

むさしのあさちか原のこくれよりさし出る秋の夜の月
親隆

草深き人とたけせぬ杉月あふさきの森の下まと月てと影
顯廣

仲正

ねやのかやもる月ハみえしかとかくこそのまかへてもらぬ東屋の軒

為業

白露にちりて岸の風に散そてまれしたて浪秋の葉の月

為盛

こゝの月の影やとる波なみよる磯ハ木末の風のこほる秋色

為経

枝こけれはさきそ出るゝ木間よりかのゝ小月の影をとゝむる

頼政

まくらねのまちかきのこゝにすたる庵をまそてにのみやる東屋の月かな

露上月

為忠

見る人とむすひあとゝや池水のてらすは露にやとる月かけ

親隆

おきて原よし急とふむらす白露の光のまゝにとまる月影

頼廣

浅茅原月すむやとして白露のたまのうつりとみえわたるかな

仲正

風さわくいくゝの花し草葉にかゝる玉ぬく露のこかくまさすとも

為業

いくたれし光も宿る月かけはあさちか露にやとりかるらん

為盛

浅茅原ゝはらの露のうすきにはわかれてやとる月の影かな

為経

かりにさく野原は露よいかにしてなさけやとる秋の夜は月

雅政

月の澄をは捨山はまさ露や昔の人のなみたなる覧

玉嶋月

しらなみてあかしの浦に澄月影をまちらをかりける玉のめそらし

為忠

月影のあく夜おけまは光とりすみて有明と松を見すらん

親隆

顕広

秋の夜のなきさは玉嶋の月見しよりそこよひさそし

仲正

櫂なれしよるれ世を見るかけりあかしさきれとそあま嶋の月

為業

浦わかれしおもひますす月影よさきなをわすれぬ玉嶋の月

為盛

名におふくみけりまふふれのきそて雲おしるあり嶋の月

為経

影さとのまさ見てはる月のいくぬまはあくさえとそさくれなりけり

雅政

山ちしまひめいいて玉嶋はあさらひかりをあましけるか

山葉月

為忠
高根より光をさきて出ぬともつきよ井の月かな

親隆
たちかへり入ぬる月も山の端の木末や名残なるらん

顕廣
かくれぬとみる世の人にみえしかと猶山のはの月はむなしかり

仲正
いつさきに嵐をのかりて行月は入山のはやくゝりけるかな

為業
山のはをさかする人もとまれかしやさそひて月の出るはなきと

為盛
有明は山のはいてし月見てそ猶それ事をかくさまれける

為經
月をまつ家小山のはをいとはしまつとたゝしむすくるかな

頼政
秋の夜の月の出入山のはをなかむる人とならは何縁なりけり

雲間月

為忠
定めなくきよくみえつる雲にみえかくれする秋の夜の月

親隆
あまの原雲のかよひはかき夜まとかのきて流秋の夜の月

風吹てはれゆく雲の浪のよそにありて月はのとかにみえ渡る
顕廣

あすか川風吹さえぬよは空すみて雲ゐにやとる月のかけかな
仲正

むら雲と思ふまをまよふ浮雲のたえまにひとへに絵のことくぬ
川きりのかゝるなりけり
為業

雲ゐにみえよけゆく空は秋の夜のあまのと渡る月のかけ
為盛

むらくもにかくるとさらに月さへはのよけれ月とあらはれにけり
為経

頼政

朧月

入かたに明かたの山のはとかすみ月はかけみれみえぬ夜
為忠

梅風にたえてあやなくよる辺まてをのか月の影とされ
親隆

うす雲にかけわたしての梅の月みてられきえてならねとん
顕廣

あさかみに川きさ雲にかけられてかすみよそ月はかすか
仲正

為業

さやかなる月の光の見えぬかはあまの川霧立へこもらん
為盛

くもり夜のあるかなきかの月影やそれともなきにまよひかなん
為経

さらぬたにまつ雲かくる月影をまちそれゆへ嵐の夕ぐれ
頼政

春とすむ霧たつ河の月影よさやけく見えぬ秋の山里

雨後月

いとひつる雨の名残の庭たつみさしくる月そまつやとりぬる
為忠

親隆

はれはつる夜半の村雨川くもゐこえきれと月まつのはなき
親廣

吹はらふあらしの風に雲きえてあかしのとまりうち明の月
仲正

ちりはつる雲のあとまで衣捨くもまよりくると流る月影
為業

村雨のはれし後の月影は軒のしつくの梢見えけり
為盛

山のはにかゝりし時雨の雲晴てあらく月のかけそまされ
為経

よひのまに水やまされる天の河晴ゆる月のまれにかゝるさ

頼政

吹拂ふ峯しみ風かはやくきし月のゆきまよひきゆき捨つらん

水上月　　為忠

立続を海の人わかなれとしかみみれは世中の清水月は流るらん

親隆

月影よあかれは白浪みかねくたまれなるたまのひかりそそまさん

顕廣

きよきとあふせ川瀬よりめくる水車めむかすにやとる月は

仲正

西へ行ありあやとまれる月影ハ山のこ海のはしみるそなり

為業

よの山岩こす浪ハきこゆれとやまれ家月ハさやれしそ見れ

為盛

やとるなる月とのとけくまさる川舩のさかのほるさしそかかり

為経

きよひなる紀のその月に出九あかてま川にまことすさなり

頼政

川きよきなかるゝまく水よりも着なかるとみゆる秋の夜の月

閨中月　　為忠

嵐ふくまやのかやくさよう人ゑらく枕にやとる夜半の月影

親隆

賤のめかこや屋のねやの板間よりかくと月のもりて見ゆ

夢さめしまくらにちかき板間より夜ふかくにかゝれる月かけ
雅廣

うらかれてあさまの小篠をもりてもる月そ昨日の東は色
仲正

板間よりのそく月はいよひつまの袖のあられねをみよとや
為業

秋の夜の篠やの板間もれわれもりはしきそてやさる月の影の那
為盛

わすれぬのねきみのつまなれ東風は篠やと月の入そられき
教政

月のいる篠やよあけゆく空き影残れるやとみする松まのうれ
雲

霜東月
為忠

秋なき霜むすふよのおくしに衣さえの月の山のはの月
親隆

かれにけるよのきらきれはさえてさそとはまてはかる月け
雅廣

秋の夜はふかく月のさえてさむとは霜やむすふ月やらん
仲正

小夜ふかく庭しろくて照月はけれぬるかな庭の初霜
為業

月影の文をまくてみるとそのさむるにこそは花と知りなれ

為盛

さえてゆくさよひら山の霜のうへにやとれる月の影そまされる

為経

草葉のちとそてらやす霜のうへに月のひかりをさらすらん

頼政

おく霜はけりしき庭とくもりてきよくと月の光みるらん

神社雪

為忠

うつまきそあさゆきはそ雪れしわきて山の雪かきくれ

いなり山（かノ）

親隆

きゆふみわけてまゐるかなり

顕広

ちるくふきすゑのみちはなりまさりやまとそのもとまて雪つもりつゝ

仲正

雪とけはやしろのかけよそほしきちはやふるかみのさかきをきて

為業

みゆきふる時わきれて久かたのあまの風しをおひとそれかれ

為盛

きとのをとおるはねもかとそのへゆきあひのまよはすとも

為経

山城のいはたの森に雪ふれはきさとそのゆふしてとそみえける

頼政

あけわたる千鳥とひとしいつらんは雪なる花のまよひとかへり
為忠

故郷雪

たかまとのおのへのみやもあれぬれは雪ふるさとゝなりにけるかな
親隆

昔みし山の梢も埋もれて雪なる里となりにてもなし
顕広

いくとせの浅茅か原と雪ふりて昔のあとやいつとしらまし
仲正

古里はけさは人もかよひこて雪をけつるあともなき山路
為業

昔みしあともなりゆく宿なれとふる白雪はいつもかはらす
為盛

住なれし宿の梢を来てみれは雪ふりてこそそれとしられけれ
為経

あれにてし古人もたえし山里は雪なる花そみしにかはらぬ
頼政

雪ふれは宿の桜そ咲にけるあはれ故人はなかなか来し人は
為忠

行路雪

あつまちのさやの中山なもふりて行先へしるとかへす旅人
親隆

峯雪にきそれぬかよひち絶て鳥のあとさへみえすなりゆく
顕広

埋なしてあしの篠ふしをせたけしいくわちぬ山ハ白雪

仲正

雪ふかき山路に人とまつめれとこむさらりしれみる人ぞかれ

為業

あえて徐道とおもひしかりきまのきよ海の山ハ雪ふかにけり

為盛

まく人とむかりつる雪に旅人の（ナシ）

為経

初雪のまた杉さる道見えてゐむさきの江越路の船

頼政

年山とをしみし冬のかへりくる山路の雪ハまたきゆれとは

竹園雪

為忠

ましなきをみそのゝ竹の雪おれはなたちさはくこゑの村雀

親隆

雪はふらさなさそのよなかつくへてねまとます竹の色のことさら

顕広

これハとりミ川やミけきられ竹のふる梢て雪をいさきさる

仲正

竹のよす梢ての雀けりしくこゑに雪れてふかるゝ

為業

白雪のそとのゝ竹とミ川とれくみ枝のことさそ見えとかれ

為盛

冬枯のむらいくの雪やねとかへん杵もまかりての花竹

為経

東とこそ見えくる白妙とも錦見えし竹のよのゝとも川ともなりぬ

頼政

このまよ夜のくらき中にも見えてあらぬ雪のさきとぞ経てなかは

為忠

杜間雪

日にそへて降らむ雪のかさなれは道こそ杣人のかよひとての杜

親隆

あさりのもちたる橋と見えぬらむきえぬ森は雪こそ人かよひ

顕廣

ゆふされはきのふのかたみやまつらんゆふ見の森に降れる雪

仲正

森中にいりてそみゆる降る雪は枝さしかはすよその森

為業

秋ならぬものちらすれ白雪のゆふてかはらしいきの森

為盛

荒村の冬枯とやぬと見えなりゆふ日の森の木末も白雪

為経

冬枝の皆たえて見えけるはのゝの森は雪ぞ積れて

頼政

友とてやゆふ見の森の雪とこそくれぬさきのさきのさかりなるらん

為忠

海邊雪

いそふみならし跡（なり）　あさ氷かよふちとりの浜の雪の上

梅川の花中かくふきそれくゆきもとまらぬ梢にそある

親隆

雪ふれは浪のよるみよ浦に出て男鹿の角も花そ咲ける

顕広

和田の原あまきる雪を見ふきるをきれきと思ひけるかな

仲正

花かとて桜の花と見てつるはまれの鶴の雪にそありける

為業

あみくさくあまをとかく雪はてていつくは見よかよさのあま人

為盛

きの国やさらの浦によふる雪は消ともゆきのそ絶れぬらん

為経

みくまのの浦の浜ゆふ埋れくいくへともみえぬ雪哉

頼政

塩屋雪

塩やくのかけひとつ川と雪間よりいつくまくらのけふりたつらん

為忠

塩なはむあまのまやは雪ふりて立煙さへきえしひまなり

親隆

浦雪にあまの塩屋をとふ人はたくもの煙ゆかりてそ行

顕広

仲正

しかすかの渡けとゆきゝゆふなきに千尋ぬあまのあかりや

為兼

志かまつのあまれ青やはらはれとも渡ハ雪にかくれなりけり

為盛

煙立清見のせけみせしとて雪ふる浦ハしてけり

為経

とし月までとくあまのさらぬん波まのまにやこつる白雪

親政

清見かた青やの人の雪かハちての色にかゝる松原ハ

松山雪

為忠

ふる雪に嵐のしもまよひめくし杉本の松のまきれにかゝる

親隆

しら木川ゝら木れ松の山かけ雪消ぬるとわかひきらん

顕広

しら木川年としきえによりまきとくれ松山やうきさ浪

仲正

打よするなみにしらく松山ハひさのうれに雪見え海ぬ

為業

海雪に松山人とおもきえていつかはその浪にこゆむ

為盛

よりかゝくその松本をそこぬれとも寸嵐と雪し解神ハ

為経

たのむ白きそみぬらむ本川ひろきのはまにふれわたる雪
頼政

杣人は嵐のさむさをかこちても雪おもるとそれまつらしてたえ
為忠

苅田雪

春かけてくるしきことしろ田に雪にてかなるいかなるなれ
親隆

けさはうつむ稲やとさしけしかり田のおもに雪は降つゝ
顕広

いさはりに雪ふむものなれ春也とや山田のかちはおほれ
仲正

冬かれの山田のほかはみえそれぬ〇らくおりそゝ雪のまゝ也
為業

山賤のかり田も雪に埋もれて春きのますへきかことなれは
為盛

冬河のたつ山田は冬と雪ふれておもはぬまひてかりとはなき
為経

そこひなき山田にそゝくる雪なれはそそのけさのあは雪
頼政

賤のおかきし稲かりはてしあしのねにしるゝとも見えぬ白雪
為忠

葦間雪

みつのはなれを〇みよしわ原にさなれや雪やあきつまるらん
親隆

難波江のあしのあさぢの三川もとこれもさながらのうき舟かれ
政廣

ゆふしほに芦の葉雪ふかくされて三千の鴨すゞる道もたえなん
仲正

横ぎらし風芦の葉のみと雪流れてあさむけしやいさきかづて
為業

なしてまがし小舟すゑて芦の葉の雪のしたいよりそす風
為盛

いと打くたれて芦をあやめくる川のわたりはたよう雪に
為経

難波がたあし揃るつもる白雪にむもれ井るさなとくやきに
頼政

浴雪にかきうつくしく見ゆるに芦の葉にまぞう霧の毛衣
為忠

墻根雪

朝日さすまがきの杉とのあやかゝる霰まじりの雪ぞまかる
親隆

かれはけし三川の丸垣花咲と見ゆるは雪のかゝるなりけり
政廣

冬ごもる藤のかれはの雪そふれてひさしきしまん風の三え

やまさとは紀路の雪は降るものとみわにまさ

為業　　きえのこりけれ

遠とほなりゆき路によそなるからにかれ峰はふりしかい

為盛　　雪はふりける

三河の松もろともきえたねに雪なれ花も散りて[illegible]

為経　　かなく

松毎に降とゝ降る村薄まじりもなき雪をおのれのみ降しを

兼政

なかぞらに吹ける雨もなき雨を波にうちれと消ゆる雲かな

風前雪

為忠

風吹もよそにぬきにかゝる糸ハえつちらさぬ雪をそ見ける

親隆

あ風よちるゝすきわうのちけりきたのみの雪にやさよせる

顕廣

風ちらふ末に流るゝ白雪をもれしかさしてたれのかとを名残

仲正

おのまゝら霰ふきさらせそて夜な〳〵は風そふくるみそまさりける

為業

水鳥の羽のうへに風さえてくらいにも雪ふる浪のうへかる部

為盛

いたつらにこのみちいよきて行ん風よさくねたるひまを遣

為経

おきつ川風吹ひらと雪ちりてふきあけの浜の浪の名残そ

頼政

雪をたに花とさらせとみるへきにたえなくも吹ちらふ松の風

簾中雪

十
たまたれをまきあくなひとよ風の吹しく雪もこそいらん

為忠

親隆

あさまたきやの板戸を明れはとすれはふりつむ雪をながむる
雅廣

かせときこゆるおとやの芦すれはおちるまゝよなる雪もことたえて
仲正

きえあへぬのとこまでさくへるみゆきみとのかふせる
爲業

あれそふ風もふきぬまさ花乃雪まよふ雪まよなる他
爲盛

見り行く里こそあれみふの道もさく風よむかふる雪のあけぼの
爲經

年へたる松もまれ乃軒端にわれそわけてくる雪にはかなれて
雅政

おなじくこすゑにしよわれゆきてをちこちまへの流れる雪か
池上雪

あせりける池乃かゞみやくもりなんたえせぬ雪のちりまがふ
爲忠

そこの池乃氷の上にふる雪はみちちりぬあるらんをのなれ
親隆

冬川もとは氷のけぬうへにたゆる雪をとちかさねる
雅康
やす年

仲正

さゝ波と氷に雪のうきてさひけは見えんゆらころありけ

為業

つゝまりぬきさ川にふる雪をわけしられてさゞやころ尾

為盛

衣はなれてむすふつらゝにゆきしほとろさしとそや雪

為経

水のうへもふる白雪は池のおもゝむすふ氷のひましけきを
汀のう雫

頼政

こや池につゝみのやねはいかゝりせそいそかせまし雪のうはゆき

車中雪

為忠

ふる雪にわか夜山のさひしさ夜すきさせしかやまに袖をかさねつ

親隆

きりしくそその花の車のうしよゝみ雪つみぬれはひきをわつらふ

顕広

うち出るこゝしの車に雪ふれは花の衣つもるさくらとそ見れ

仲正

うちむれや先くさしこさ我へ花車にさふく雪のみちつれ

為業

うち渡しかへる車にかる雲をひかぬのよるかてねりひけるかな
爲盛

春さそふ雪ふりつみし暁乃ゆきみのくる海にいくへそらん
爲理

ちる花の雪のやりつかしけるをなせてつる車とゝむる
教段

わかせよとまつまつれの跡なからちちよ雪ふみゆく車かな
爲忠

戀十五首

未通詞恋

いそかしとかへるなからの橋もしらみこゆる里にてもくるしはしかな
親隆

いさ夜よひ出るをしのふまにむせひてのみもすくるとしそれ
顕廣

人しれぬ思ひはたか山のふもとなるそのひ河ふきそふまさるらし
仲正

人しれぬなけきのえたにやとしくるあとせめてみえしわかまゝ
爲業

されはやいはてもまたしらてきてへきたいさなしてもとむ山川の水
爲業

松か今もかみのくらせふつのこたに出ぬ作者のこゝろ哉
篤紹

さわしき余市の家しきや龍とて中くえとなきこさね
杉政

松か今もいそたかふのちる色のさちよみてしかる哉

名よ紅庭

人しれぬ事とうきけるかくすもとみるからうつる我こゝろ哉
篤忠

あらきのくかりし紅とみるせ共いと洞のさくら哉
親陰

殿庭

うきこゝろこすはもちらうすれは此の國乃こゝをきし人のかへをきに
仲正

水くきのこきんちるもとみさきつらんてたきゆきさなるをそさる
篤業

ねさをみさく乃あそなれちそこしうきのはなさしと露もかきみす
篤蔵

ちそくあく落かゆのまんつきくさうつろしは　しぬ男をと
篤紀

ささちりこ紅をはのにみそらりきたるよかなれる　しら哉

頼政
ほゝきゝしたゝきをなつさにをすれなくきゝにけりとみるにほけても

聞音恋

為忠
まつもすゝ金にかよはし音たえにし露も心をかけぬまそちかれ

親隆
たえぬるはあるものとおもはすさらぬなくれはもすれけふひゝくなる

顕廣
笹はらにふく秋の男鹿はこゑよりもや声すらむとおもはるゝまもしると

仲正
わきもこか声はつてにもきゝてしかなけくものとしりのちけさくちらん

為業
これやさは我しひ渡れ思ひ書あれはやきさふえ今のこゝのかよ

為盛
いはせむしあなかしこ御のみやしらくうれしさのかくもきかるらん

為経
何事をふとはいへともわすられきかれぬるほとにおもひかはせは係も

頼政
わきかこゝろまかせのをやつにありてひまもなきをそまちし人

絶見恋

為忠
さまかこのひまにもろれそころ月をとかいはふかくとふらん

親隆
いさみかさ鴻かくれわりのかり舟みすなるかにさふきて渡らん

顯廣
秋かるしてまたもひしきをかさねよりや草のいをよそを渡りて

仲正
ほのみえて鹿ありまちなるもかり舟つゆかたにききたるをせん

為業
わきもこに鴻かくり舟すれはのよみんそてまき渡らん

為盛
冬されはよしくゝけしきの淀もみなりたれはしとゝと芳

為經
さしかへするほとへさゝねのひわつきの鷺よらんあしまかを見るき

頼政
孫この緒にかゝりし玉簾のすきまよりほの見ん人をねうとこそ見え

時ゝ見恋

為忠
涙ちりまねよりての袂よすかるみるめはよるの袖承

親隆

幸よるひく沖乃島ゝ石白浪にたらくみても如何ゝ袖ゝ外

頼廣

袖のさしらはかゝ風渡よ枝なしいりやゝをのあはきもらまふ

仲正

人心あさかもみちるわかことのこれくみて我かさしうきと

爲業

信こ也の緒のおもへてもあひらぬしおもむ世のを子のうらみとされ

爲盛

いたせんさそとみさいのたえひおとにまみえても今おもひけしらと

爲經

見るうちひまさ斗を信くさきくまその乃さけいらましはかなし

彬段

いろませんかふ表おくて第行の花から命の今のつらさも

隠在所恋

君か住とおもにわくて不事の所こゝかくたの今はしわらん

爲忠

いたせん年すかす絶ぬる程のそのちへをといふかりあと

親隆

かつくもやさうふとあ今よすむさに時て見るかはみつるよそく

頼廣

仲正

あとみえてあゆみもとまこのむけちやまとも
しらとかへて

為業

ひ浜まのをりかせやの春のかるそのそらとくた
いとまうしから

為経

いりひとさゑもさえにゝち水みゝきをうけも
そことおりつよ

為盛

はのゐのかふもの春もいりよくそこにあり渚
おりせなそうき

教段

かつりこと男鹿の影せわきゝらりもゆくゆえ
春のひけゆく

末不會恋

為忠

冬河の浪にもつれもよきたけれ袖もつみてかへし
川ゝみ那

親澄

かく雍よむしにきてはかくぬれもまきむ孫おりかぬ被もと
こそ思へ

顕廣

何ゆへや八重の唐衣其のきぬもやにたち占む
かゝれゐ

仲正

山深車をいやすくとまつらとしはぬ志すなきは
下細

為業

そのかみにきて妻木こりしなしや谷かけおのへの道
為盛　こけ深し
あらはれて今宵わか身にしのふすて何かは昔にくらへまし
為経　乃さ也
契りおきて久しき末をあらはしつわかそてもぬれて
頼政　志のふる袖か

逢日増恋

かつきする海のひとつるたくなれはくるしき物を
為忠　こけぬ志ゝ
きのふまて多をからし我か袖はいかに深まる秋
親隆　生あかみえ
なかなかにきのふ河そこひとつの中の海に潤むなる波
顕広　さりゆくれ
いかはかりやすかなみたこしはしのきぬる袖かあはれ
仲正　夏ふかみへは
我恋をきつ袖のいかにかひとしきそへて雨流れ
為業　人をそそも
まち侘る日をかそふるにまさるは洞の岩の袖
為盛　またわひる
しのひしてしのひかねつゝ今はたゝ人めもわかす

為経　孫すれは絶

いかにせむあはぬ日数のゆかし渡ゝに渡ゐ女なし

頼政　渡らぬ哉

西ゆかの濃りなかく恋ゝ子ゐにしへて

遇人妻戀　よその宿かれ

為忠

かゝみにしもゆり出て見ぬ人にすみなれたる

親隆　あらく

せきうれきさのひまてよ露ねあひそこれとあは

顕廣　何かたらん

ぞよいかよんに思ふたけれん人ゆとやとのつまと見ん

仲正　あから

ひとつまやあきなきあすかひれとりたのきをとけく

為業　しそにのみ

ふ人ありそのはたしやとなりミあみてゐるよりけぬ月を

為盛　かさし

たのもしき中をたのまて娘りもちさる秋を

為経　かよはし

あま井なかしめきをみよたかけさみしとそのさそ夜なり

頼政

志のふれとめけつゝもうちひとつまハ雲わハせのよろしも なりけり

為忠

絶後恋

今更に忍ひれ出しを何まての後のつらさに無きうき名哉

親隆

わか事ハ絶にし後をさね何らまさハふしくる哉かりけん

頼廣

こゝろ宇そつらくもあるらわか玉の年のことをもしるけれまゝふ

仲正

恋しさのやまにをこるそらの孫昔よ人恋しろハよそゆ婦

旅髪のあそ剃し後よりハ恋くものゝうけしきかな

為業

松も昔の青契りしひ何まともならふやとハそハ末き

為盛

昔乃しらかのさハの具足れ後今更に忍ひさらん

為経

言くれわまふハ鳥のほのかにかまとなりぬる人の哀さ

頼政

若井恋

為忠

人心そわすましやまのゐのあさくになりと思ひしものを
親隆

我恋ハいさゝ井の清水みさひ井て影をたにみてしる人そなき
顕廣

草枕宿やからましわする井よ影見し人のかけやみゆらん
仲正

手にむすふ人を井の水のかけしにゝこるあかぬなる
恋もするかな
為業

流井はよ音ひゝひける音のひとの影やさゝひなる哉
為盛

我恋ハ古井におろすつる緒のたえぬみをゝくるしかるらん
為経

しらせはや音のみそいつはしり井のふかき思ひをたとらや
たすらん
頼政

いはゝたにあらそて古井のあさかへもとをか恋をこし人よすき
安為忠

年をへてつきせぬ思ひをたのむらのいくよりかハみてもときめん
為忠

とやくゝる馬の音のさゝこれのやそこあはかゝらき
親隆

末　　顕廣

我恋るとむさへしられぬとむ島かけても見え絶なゝ　恋りまかなき

仲正

わきもこかこゝろはさらすとりかゝみさすとうつりけてしな

為業

もろ恋のよそめもあかすますかゝみすさ人とよひ　かさねれ

為盛

いつよせんかくれなきのみそかくは憂き恋よちらく　おもふを

為經

よそせとも粮みてゝ思ひゝ恋のさしゝれきとあや見絶な

頼政

志らしかとおもひし程よやよこれのそのとをりぬる人のこゝろかなしき

寄鏡恋

為忠

目にはみて恋をますみのます鏡かけとはいへとそてけとこそあれ

親隆

鏡にもそへしよその事やあらまし恋しき人のかけうつりせは

顕廣

こゝ人を見るかけしらつゝはます鏡曇る見とも返るまし

仲正

我こゝろ人ハ見えこそます鏡にあはれきみのむかしひゝする
爲業

見るもうく鏡のかけのなくさましてもひとすきのからさりせハ
爲盛

あさましや鏡のかけを見るたひによわとろへゆく身のほさら
爲經

かゝ人のはてハかりしかゝ鏡まれそも君にあきはてゝ思
杉段

しわゝるふかゝみ劔し志のもゝむかしひからも袖をぬれける
爲忠

寄錦恋

かゝ人のさしろせしふところきみゝとき思もまさりける
親隆

あくはまのにしきろくぬをそけくてゝそいふてもあふさきゝや
顕廣

涙川にしきをわらぬ身なりせは人にしられもみせましものを
仲正

かゝくしてはゝやるよのさむしろよとこきとそあやかれける
爲業

わきてゝ錦の古里へまちかく人ゝふゝ支のあろもなすらひと

よしさらに人のつらさにかゝるはいさきよそにおもひかけれ　爲盛

よひさに人に忘られはてぬれとさはりふらくかはれん　ちやらん　爲經

今はたゝ身にはなれなまし思ひきりこゝ海のなるよつむはき　ありなわ　頼政

寄絲戀

かくのこゝろを絶てすめれとこひはあかてあけの糸と　爲忠

親隆

かきこのやまとしやまなもたけ糸のやまよりとくる　よりとまみ　盛廣

我戀は松ほみのかゝるのそのいつ計かはむすほれ行く　仲正

人忘れぬ戀はすこしなきあれやらはむすき井て露もわすれぬ　爲業

秋のよもあけのいとをこひしれはかくはさらみれとく　爲盛

あひ見てやまとてのつれいくをこひさひさふとこそかたらん　爲經

かゝき添てうる人もなきしほにはみそきれてふるよろな
頼政
やにさせるうらしのしまの糸なれやとゝ陰もき人の
きこゆハ

雑十五首

卯杖

為忠
わかちる代をいはふの栄をさそへてとしふへてはちるなかすの
こやはえ
親隆
ひけまて花の色てひすひめてこるよはえをいはひ
はあつる
顕広
むつきさらの杖よきりてとしやちよの坂をこえこそよさう
仲正
うつえはき肴よそへる代もつきせぬはこそ君にいはふ
なるき
為業
萬代のひとのきしもこそを祈てかたこすうつえの久し
かるらん
為盛
いふしく日影の糸をよりそへてちとせのうつえさて
すゑふらん
為経
いくちひろ志て玉にはなか文おりて南山のうつえとなさん
とすらん
頼政

八千代とも君かつくへき杖なれはおのか玉椿ゆひろへてそら

蹴鞠

為忠

しほえをとおしけき庭のちかかりに落るまりの
なをもかゝらく

親隆

人みな立出る庭にまりのかゝりこすなき身をいふかせん

顕広

とふくまきもありもせてそはかれ作里にしけても
花よつけても

仲正

ひねりすふかるゝ姿まりとなへて花をむつまし
まれなきかな

為業

遊まりふたちなゝやとの花さりこの風はちらし
おしのふ

為盛

かちとのことさりにもちられとまるてまりふかゝり
けられ

為経

山里の花の下手の志けるなかまさる人かまりまとも
かりけれ

頼政

闘鶏

おしむへきかなきことをありさけて殿と末まよりかゝり
かゝりけり

為忠

春雨よこのけおりしてねやゐるのみせこそをかきたに
きてくるれ　親隆

かへしてこそ縣うつちのさねたかたにうちみせこそ縣
はきそけかさ　顯廣

咲花もなく鶯も春はなかりあるをせさるまふみも
有らく　仲正

もくてみてまうそそてまるひさゝりれこハつちもちそに
けぬつふな　為業

春雨乃花乃庭よゆるとてもおいするとものゝみけ
立く森　為盛

はりさも水さも絲よ春かすてあまゐるのまし源に家しきみ
かけすらさ　為経

松陰つくる多るまのゐるかけ小さ人おこねのてよとすろ乃
かくしと　頼政

ゆり花きてとものそらひのかゝりゆつゝくもまく春あら
かくされ　頼業

わかれしハさてもやひてとさすゝく春ゝ出かく源掛
なとさる　為忠

むらしハそのやひらくをそるえ川く屋とのへにつよさひけ
つゝれ　親隆

まつ風かみやまもりのかみ今そちからしいまも
いさかぬ

顕廣

山根乃かきねよりふやしろかみ卯花さけるかとよみ風と

仲正

あかりそていはふとも里をへやたにみまつるゆきをまもや成ぬと

為業

宮とこにはなえらしいさ西くゆふてかける卯の花に
なり

為盛

かるかにちる卯花とみえつるやゆふしてかくる風みのひかろ
き

為經

ふとにつるぬきまつすまりしをひもろきにて
ささちらすなり

頼政

賀茂祭

ゆふかけても宮ゐしあふひきつさえみやの
のふのみゆきを

為忠

うまひこのたちくもらふをとほ今やきえんのかける鶴
らん

親隆

ゆふ人のしふみなく宮のみつるあまねきうるんのこゝろ
しらり

顕廣

仲正

年をへていくまつりふるあふひ草ふたとりわきかけてこゆらん
為葉

ちはやふる神のみあれしてみ山のこゑれのもとかし
なかるらん
為蔵

ひとなみに三月のさいはひみちのちのひかりとゝかむかな
ふかしてなり
為経

去秋のこゝろやせつのひもとゝもふにたれぬさきにあらなん
賀茂の氏人
経政

みあれひくおふまあふひのかけしてみよなかき人のあふひ
あらし哉

騎射

五月雨小てまのひとつきさふかれて呼めてそやこゆらん
かゝらん
為忠

かちまけころはせかめてまとひくさかくやくふのみゆ
かゝらん
親隆

むれくはうちてさゝまてよ郭公ひむかし風もつくしねよ
敬広

あやめふき五月のゆみをひきしかはあやしのゆきへこかそゆき
仲正

あかりをみてしきやあやめ草まくふひきはてまゆみ
かゝらん
為葉

ゑらひにはあやめをさしくさしそへてひくら乃へみ　ふやならん

為盛

あやめふきてみきりのうちにつゝむ波のたえまをみせはいさせ　つるや

為経

あやめ草ながきねながらぬまゆみをもこもこふしそひく日なりけれ

頼政

乞巧奠

ひこほしもまちこふてたにてしらぬかは七月乃ちひのまつれは　とりし火

為忠

親隆

あき乃たにはみさのとりし火かわつきつるすゑしのきり乃あとらん

顕広

かさゝきは花乃標や七夕は雲ゐのものをそてりしむ　一段本

仲正

いにしへはわかてぬそてやみけるかつさゝかちのひとよさし　ちさきむ

為業

七夕乃あまのかはらをさぬおきさ毎にかす事はなとそしていり　とる

為盛

ゆみはりつきる鳥はわれをこひにこしの空ゆきあひのこゝろなりけれ

為経

ちきりけるひやまとりとこそみせしほしあひの空をまつはなれ

頼政

七夕をまちわたるいはまくらしてわかひこのかへるさのとをちく

相撲節

すまひくさひさこそおもとるすまひねさのつきしくもさきさら

為忠

さしかへてなけはふかもとまひねさのひさこそれとしけれ

親隆

ゆふほよわかひの花乃さしあひくいはれたるかのてかひとまらん

顕廣

秋霧のたちかくるそてにいれてこそはなれやゆきなつかん

仲正

為業

あさあけのさひしみとりかはをはひのまさるすまひひくはくるまてみつ

為盛

わりなくうちてまけくそてぬれてみつけるゆふかせのかれ

為経

とりのあはよくはらわれあきもすくはかりてはなにたなはん

頼政

風吹けやのよいけふかすひくさかえのうそてみよかけのすけ

小鷹狩

為忠

出まよふ風に飛りかへる刈田のくもにあはせけるかな

親隆

小萩原のうつらかりにと出てまちかね暮つるの露だに

顕廣

夕くれの尾花まき狩やかへるとて野へにかしゆゐ

仲正

雲雀とるまのまへにはなつまゆみ秋の刈田にそめぬ日もなし

為業

あさひこのみねのさはまよりてたかの鳥けいけり

為盛

おほくこそきみかみたかのたのにいさあそひのかりもせん

為經

いつ様はあまの原のやくさ見えつれて鷹も放れん

敦政

あし鷹の羽風よそにも鶉なく紀の尾りみされまする秋の尾花

射場始

為忠

ゆみとりの人の為人ことうけてまとあつきそ刈ねらひさせ

親隆

神世は[illegible]の[illegible]つゝ[illegible]ふやまとあめち[illegible]かならん

顕廣

雲きりの杉[illegible]人ハふ[illegible]きハ[illegible]ら鳩よまちらて[illegible]ん

仲正

霜[illegible]のまもの中[illegible]鳩のとれけまは（サソ）

爲業

諸人やまハけ[illegible]てあつさら[illegible]く[illegible]そのきえ[illegible]葉

爲盛

ふやさしきの上[illegible]かろやしていつけ乃せよきさかて[illegible]む

爲経

みゆきの[illegible]まつらよ[illegible]りしくふ[illegible]まを
けちらめれ

教

紅葉ふする神世は[illegible]あめさらひきうに[illegible]

五節

爲忠

あれちてあらふ[illegible]をとめこゝをみの袖るとよのあかりに

親隆

ふかきはみそきのまてとをとめこゝろむしれなるとよのあかり
かん

顕廣

いつれん空りその月影よさよるゝひかりのよそにみえんやは
仲正

冬の夜乃雲井の月をみるまゝにさよのかりやをおもひわひぬや
爲業

余所にありし世袖なる九重のさよなかありしをわすれしとそやれ
爲盛

諸人乃袖されてくおもふかな月影しらふさよのなかそらに
爲經

雲のうへにならひかりし袖をみてうし殿の事をとそ思ふ
頼政

臨時祭

今日まつる神のみや乃さとのねよ袖ふりはへてあそふをとめこ
爲忠

ひめこ松ちよもやすみし里に諸人のかさしは千代をさしてよるらん
親隆

かへりたるまひのまへのあかてこそあかぬわかれたとさへるらん
顕廣

ならて井るみたらし川も庭にてく山井のかけやみゆらん
仲正

これなまふりのゝ車乃まへれおほ年りたく錦かへしを

名さへとかもの川浪たち出てみるひとも安すくそ見ゆる

爲業

花やちるらし風もなく[illegible]の山のさくらもちりしはる時しら雪

爲盛

なきさゆくみきはの川よりかけりくる袖をつらねてすむまし[illegible]

爲經

うれしくも浪のをとをきゝつゝ世をすてゝつゝるかゝるの二こゑ

頼政

庚申

爲忠

おもてあらふこゝろ名こそなりてそのほのみさりからせみとよむらん

親隆

思ひあさのみ川にありける人をさへこひこふる夜の ねてもさめても

顯廣

きしへふさてせきとめにかるを[illegible]とて[illegible]かり[illegible]

仲正

ひまなかりしとおもひける人と友[illegible]をしき逢坂を越る

爲業

ゆきもせぬねをなやむる[illegible]よそておもふ身にはまさらん

爲盛

青毛にはぬるをまかりるめにほしいみまれあひつゝなふかりられ

為経

栗毛まさるそのせうまこゆる時のつきいはまして
寺れも

頼政

さ(れ)そのみゝをもとをきてかうなみさきのあかはね
打る

競馬

左手ひつりよむうちかけよみてならにゐよされてかけおち
駒

為忠

みきめむめまかりとゝやきみてひとまのかけはぬらくはぬ
かるき

親隆

猿も柄とりつきてもこかまこれやひまりこまね
わらむ

邦廣

仲正

左としときをひくてきやうにけのこまをかけかち
とよる

為業

きをひつまに同し猿やのかりなりなとひてもぬきさね
める丸

為盛

打し見て百度いくとみれとせひことけても
かゝる光原の那

為経

左と波をちさもちをおいはよる
なり

二度のおしハせ千きんたはまけ有るハ人のこのみのさうきなりけり
教政

圍碁

山人の斧のえ朽しためしへもかくかけろきをやめそらん
爲忠

いにしへの斧のえ朽しときさにふしかせうちたにけり
親隆

さゝ波や石ならかたんふしきひおる手せまれハ打ちしへうちとけ
顕廣

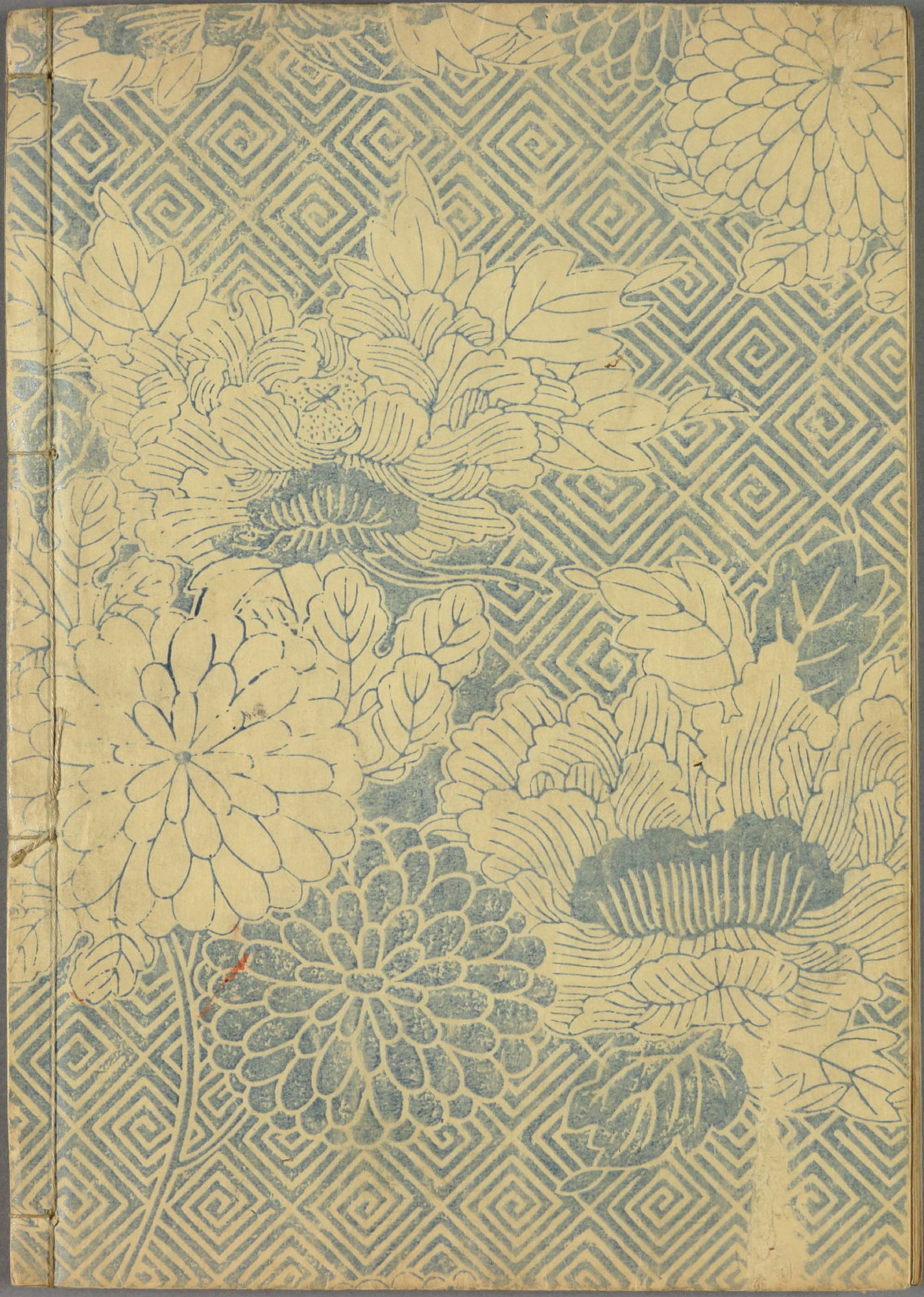
仲正

しら浪ハまさこうちよりくらハよするむのかけものかて
爲業

うちまけるかたみの枝のハらハおしきえ露そきちれかへん
爲盛

かちまけハ漢のハ石にはけまてたゝちそてしけるなりけり
爲經

いかにてうちれともせくそれ石をこひわたれとそうちな猟文むし
頼政

うちうちすたつよからみをとてなまて隔なきさこそあやうまれける